池端北耕地下ノ割遺跡

駒寄スマートインターチェンジ大型車対応化整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

前橋市教育委員会

池端北耕地下ノ割遺跡

駒寄スマートインターチェンジ大型車対応化整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2018. 3

前橋市教育委員会

池端北耕地下ノ割遺跡

駒寄スマートインターチェンジ大型車対応化整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2018. 3

前橋市教育委員会

南東上空から見た池端北耕地下ノ割遺跡調査地点

調査地点右側は関越自動車道駒寄パーキングエリア、左側には午王頭川。正面右は子持山、左は小野子山、左端には榛名山、右端には赤城山の裾が入る。子持山と赤城山の間奥には利根川源流の谷川岳。

奈良時代初頭（８世紀前半）の大規模な掘立柱建物跡

床束のある高床建物で、西側片面廂の段階から四面廂へ変遷する可能性が考えられるが、短命であったようだ。

巻頭図版２

調査区全景（上空から・北上）

は　じ　め　に

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する池端北耕地下ノ割遺跡は、本市西部の池端町にあります。関越自動車道駒寄スマートインターチェンジ大型車対応化整備工事に伴う発掘調査で、調査の結果、古代住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、道路状遺構などが見つかりました。現状での保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められことに厚くお礼申しあげます。

平成 30 年 3 月

前橋市教育委員会
教育長　**塩　﨑　政　江**

例　言

1．本書は、駒寄スマートインターチェンジ大型車対応化整備事業に伴う池端北耕地下ノ割遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、前橋市(主管課：道路建設課)の委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課の指導・助言のもと、山下工業株式会社（代表取締役　山下 尚）文化財事業部が実施した。
3．発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市の費用負担で実施した。
4．発掘調査の要項は次のとおりである。
　遺跡所在地　群馬県前橋市池端町　285-2　285-3　286-2　286-3　284
　遺跡略称　29 A 231　　遺跡番号　0108　　調査面積　1,585㎡
　期間　【現地調査】平成 29 年 8 月 1 日～同年 10 月 12 日　【整理】平成 29 年 10 月 4 日～ 30 年 2 月 28 日
　調査担当者　永井智教（山下工業株式会社文化財事業部）　調査員　原野真祐
5．遺構写真は永井・原野・新井一(まりも工房)が撮影し、遺物写真は永井が撮影した。
6．遺構測量及び平面図作成は田中隆明(タナカ設計)が行った。
7．現地調査作業員は以下のとおり。(五十音順)
　荻野響生・鏑木恭子・小和瀬深夏・斉藤香・白石真知江・橋本新一・平沢房之助・松島忠夫・光安泰子
8．整理作業は永井を中心に原野・高橋実果・久保田智子・秋元智子(株式会社コクドリサーチ)が行った。
9．本書の執筆については、Ｉが前橋市教育委員会（文化財保護課　小峰 篤)、その他は永井・原野が行い、各文末に文責を明示した。
10. 本書の編集は永井監修のもと高橋・沼畑伸一(株式会社コクドリサーチ)が行った。
11. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
12. 調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。(五十音順・敬称略)
　赤井博之　青木　敬　池田敏宏　出浦 崇　岡野 茂　田中広明　外山政子　中村岳彦　能登 健　山本良太
　横澤真一

凡　例

1．遺跡、全体図におけるＸ・Ｙ値は、平面直角座標Ⅸ系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2．挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。
　【竪穴建物跡】H　【溝跡】W　【道路状遺構】A　【土坑】D　【ピット】P　【性格不明遺構】X
3．遺構図は 1/2,000・1/200・1/100・1/60・1/40・1/30 を紙面に合わせて使い分け、各挿図中に明記した。
4．遺物実測図は土器 1/3・鉄製品・石製品は 1/2。遺物写真は 1/4、一部を 1/2 とした。
5．遺構図・遺物図の網掛けについては、個々の図中に凡例を明示した。
6．書で用いる火山噴出物の略称と年代については以下のとおりである。

【浅間山Ｂ軽石】	浅間Ｂ軽石	天仁元年（1108）
【榛名山二ツ岳 - 渋川テフラ】	ＦＡ	5 世紀末
【浅間山Ｃ軽石】	Ｃ軽石	3 世紀末～ 4 世紀初頭

目　　次

巻頭図版　1・2
はじめに
例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の方針と経過 …… 5
　1　調査範囲と基本方針 …… 5
　2　調査経過 …… 5
Ⅳ　基本層序 …… 5
Ⅴ　遺構と遺物 …… 11
　(1) 竪穴建物跡 …… 11
　(2) 掘立柱建物跡 …… 14
　(3) 道路状遺構 …… 16
　(4) 溝跡 …… 16
　(5) 土坑・ピット・性格不明遺構 …… 17
Ⅵ　発掘調査の成果と課題 …… 35

挿図目次

Fig.1. 調査地点と既往の調査
2. 遺跡の位置 …… 1
3. 周辺遺跡の分布図 … 2
4. 基本層序 …… 5
5. 調査区全測図 …… 6
6. 分割全測図① …… 7
Fig. 7. 分割全測図② …… 8
8. 分割全測図③ …… 9
9. 分割全測図④ …… 10
10. 1号竪穴建物跡(H-1) …… 18
11. 2号竪穴建物跡(H-2) …… 19
12. 1・2号竪穴建物跡カマド(H-1・2) … 20
Fig. 13. 3号竪穴建物跡(H-3) …… 21
14. 4号竪穴建物跡(H-4) …… 22
15. 5号竪穴建物跡(H-5) …… 23
16. 6号竪穴建物跡(H-5) …… 24
17. 1号掘立柱建物跡(B-1) …… 25
18. 1号掘立柱建物跡(B-1)の柱穴… 26
Fig.19. 2号道路状遺構ほか…… 27
20. 2号道路状遺構ほか…… 28
21. 出土遺物(H-1) …… 29
22. 出土遺物(H-2・3) …… 30
23. 出土遺物(H-3～6) …… 31
24. 出土遺物(H-6、B-1、A-3、P-110)… 32

表 目 次

Tab.1. 周辺遺跡一覧表…… 4
Tab.2. 土坑一覧表……33
Tab.3. ピット一覧表……33
Tab.4. 遺物観察表……33

写真目次

PL.1　1. 調査区遠景（南上空から）
　2. 調査区近景（南西上空から）
PL.2　1. 調査区垂直（左が北）
　2. 調査区完掘状況（南から）
　3. 調査区完掘状況（北から）
　4. 表土除去状況（南から）
　5. 遺構検出状況（途中・左が北）
PL.3　1. 1号竪穴建物跡（西から）
　2. カマド調査状況（西から）
　3. カマドの石組（北西から）
　4. 貯蔵穴（南から）
　5. 掘方調査状況（西から）
PL.4　1. 2号竪穴建物跡（西から）
　2. 掘方調査状況（西から）
　3. 南壁柱穴 P1・P2
　4. 南壁柱穴 P-1
　5. 遺物出土状況（西から）
　6. カマド調査状況（西から）
PL.5　1. 3号竪穴建物跡（西から）
　2. 掘方調査状況（北東から）
　3. 調査状況（西から）
　4. カマド上を覆う集石と鉄器（手前）
　5. カマド調査状況（西から）
　6. 表土除去状況（南から）
PL.6　1. 4号竪穴建物跡（西から）
　2. 遺物出土状況（北西から）
　3. 掘方調査状況（北西から）
　4. カマド・貯蔵穴調査状況（南西から）
　5. カマド調査状況（西から）
PL.7　1. 5号竪穴建物跡（西から）
　2. 掘方調査状況（西から）
　3. カマド調査状況（西から）
　4. 北壁に洞状に穿たれた P3（南から）
　5. 南壁に洞状に穿たれた P1 の土層（南から）
　6. カマド調査状況（西から）
PL.8　1. 6号竪穴建物跡（西から）
　2. カマド調査状況（北から）
　3. カマド遺物出土状況（西から）
　4. カマド袖の粘土（南から）
　5. カマド付近（北東から）
PL.9　1. 1号掘立柱建物跡　主柱穴検出状況（南から）
　2. 1号掘立柱建物跡　調査状況（北西から）
　3. 1号掘立柱建物跡　完掘（北上空から）
　4. 柱穴 B-1 P-1（南から）
　5. 柱穴 B-1 P-2（南から）
　6. 柱穴 B-1 P-3（南から）
　7. 柱穴 B-1 P-4（南から）
　8. 柱穴 B-1 P-5（南から）
　9. 柱穴 B-1 P-6（南から）
PL.10　1. 2号道路状遺構（南から）
　2. 3号道路状遺構（南から）
　3. 3号道路状遺構　上面礫検出状況（南から）
　4. 3号道路状遺構横脇の土器（北東から）
PL.11　1. 1号道路状遺構　断面（西から）
　2. 4号道路状遺構　断面（北から）
　3. 1号溝跡（南から）
　4. 2号溝跡（南から）
　5. 3・4号溝跡（東から）
　6. 5号溝跡（東から）
　7. 6号溝跡（北西から）
PL.12　1. 13・14号ピット（西から）
　2. 77号ピット（南から）
　3. 100～102号ピット（東から）
　4. 103号ピット（南から）
　5. 108号ピット（南から）
　6. 111・112号ピット
　7. 調査区パノラマ（南西から）
　8. 作業状況（南東から）
PL.13 出土遺物（土器）
PL.14 出土遺物（土器・石製品・鉄製品）

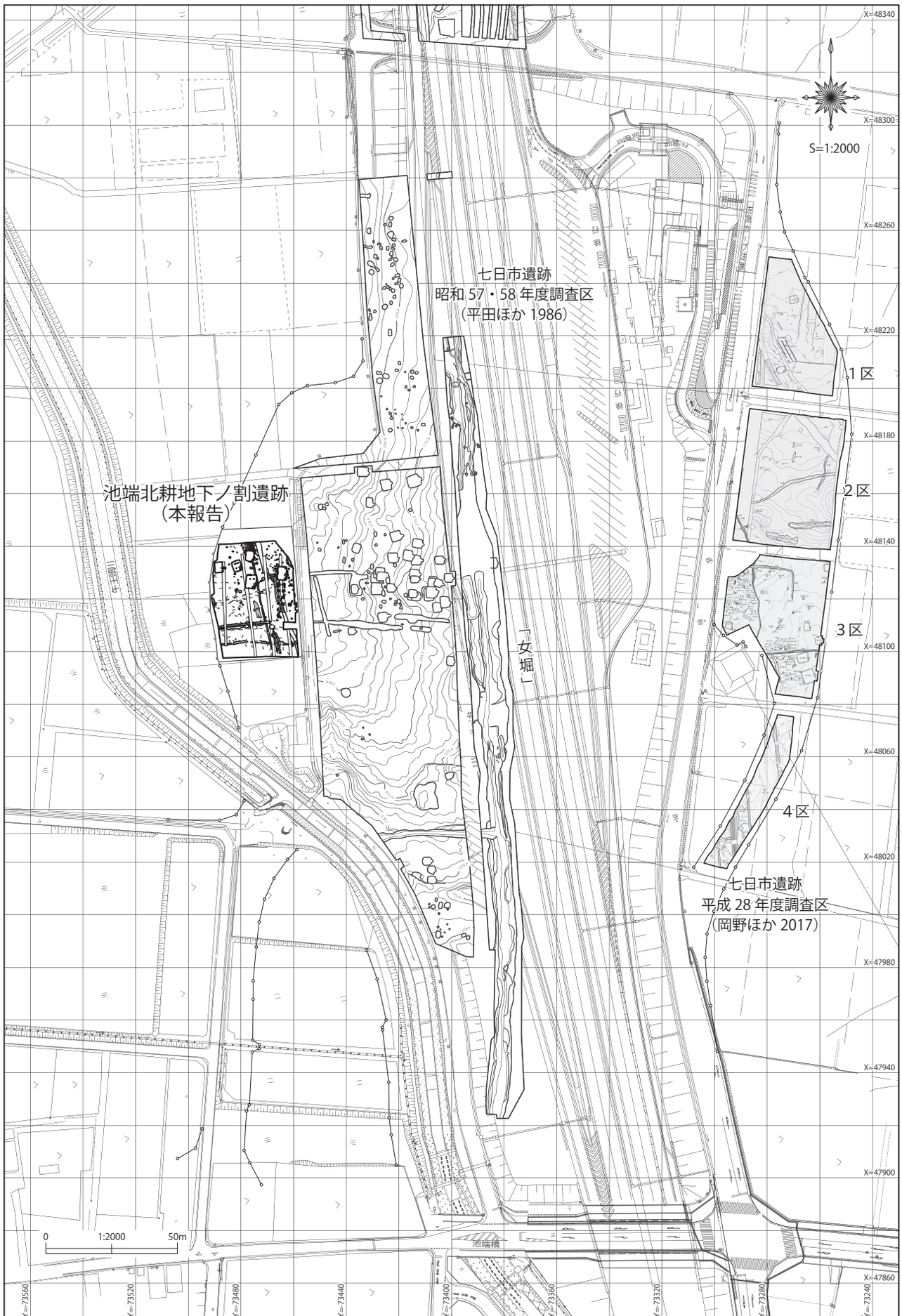


Fig.1　調査地点と既往の調査

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 27 年度における公共事業照会で、関越自動車道駒寄スマートインターチェンジ周辺道路整備事業（以下「当該事業」という。）を把握した。当該事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していること、また、関越自動車道建設に伴う発掘調査実績等を考慮し、前橋市長　山本　龍（道路建設課）（以下「前橋市」という。）と協議を行ない、事前の試掘確認調査を実施することとした。

試掘調査は 2 回に分けて実施した。午王頭川右岸部分を 1 回目とし、平成 28 年 11 月 21 日に実施した。調査の結果、遺構は検出されず、午王頭川右岸部分は本調査不要と判断した。次いで平成 29 年 2 月 14 日 ~15 日に、午王頭川左岸部分で試掘調査を行なった。左岸部分では古代住居跡等の遺構が検出されたことから、埋蔵文化財の取り扱いについて前橋市と協議した。試掘確認調査の結果と工事計画等を考慮すると、検出した遺構の現状保存は困難であると判断し、記録保存を目的とした発掘調査実施について相互合意に至った。

平成 29 年 6 月 6 日付けで前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に区画整理事業に伴う発掘調査を実施中であり、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 6 月 26 日付けで前橋市と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。なお、遺跡名称「池端北耕地下ノ割遺跡」（遺跡コード：29A231）の「池端」は町名、「北耕地下ノ割」は旧小字名を採用した。

Fig.2　遺跡の位置

Fig.3　周辺遺跡の分布図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置

今回発掘調査を実施した池端北耕地下ノ割遺跡は、前橋市北西部の清里地区に位置する。清里地区は昭和30年に前橋市に編入合併した清里村の範囲で、北に北群馬郡吉岡町、西に北群馬郡榛東村に接する。なお、清里村は明治22年、青梨子村・上青梨子村・池端村・野良犬村の合併によって成立した経緯があり、現在の大字にその旧村名を残している（大字清野は清里村合併時に清里の清と野良犬の野を合わせて改名された）。今回の調査地点は北と東が吉岡町に接しており、清里地区では北東縁に相当する。

遺跡の西側には利根川の支流である午王頭川が流れ、東側には関越自動車道と駒寄パーキングエリアがある。平成18年の駒寄スマートインターチェンジ開設以降、東方の吉岡バイパス沿線を中心に大型店舗の進出が相次ぎ、近年の変貌めまぐるしい。今回の調査原因であるスマートインターチェンジの大型車対応化整備は、この変貌に更なる拍車をかけるものとして期待されている。

地理的環境

遺跡は榛名山東麓に位置する。地質的には度重なる榛名山の火山活動や雨水流の風化作用で形成された広大な扇状地形である「相馬ヶ原扇状地」の末端近くに相当する。

地形を詳しく見ると、東1㎞程度には段丘崖をもって利根川低地帯に臨み、反対に西方至近には、約1.7万年前に榛名山の外輪山の一つである相馬山付近で発生した山体崩壊「陣場岩屑なだれ」由来の「流れ山」と言われる小丘の集合による丘陵地形が迫っている。遺跡脇を流れる午王頭川は、榛東村上野原の富士見峠付近を水源とし、前橋市総社町で利根川に注ぐ。等高線に直行して下る同様の河川としては、他に吉岡川・駒寄川・八幡川・染谷川・牛池川等があり、榛名山活動期には火山灰を泥流として押し流し、下流域を埋没させた。

歴史的環境

遺跡周辺は先述の「陣場岩屑なだれ」の後、風性火山灰土の堆積を挟み地表面が安定してきたであろう縄文時代前期以降遺跡の分布がみられるようになる。また、古墳時代後期初頭の榛名山二ツ岳形成期の噴火を被災した後100年程度は遺跡が少ないが、再び安定した奈良時代頃になって増加する傾向がある。正に榛名火山の動向と一体の地域であったと言える。以下、本遺跡の主体となる奈良・平安時代までの考古学的な経緯についてまとめておきたい。

縄文時代　前期から数軒の竪穴住居や土坑数基程度の遺跡が点在しており、本遺跡と同一遺跡である吉岡町七日市遺跡（2）もそうした遺跡の一つである。とは言え拠点的な大規模集落の出現は中期で、代表的な例に吉岡町沼南遺跡（8）や榛東村十二前遺跡（19）がある。十二前遺跡は中期加曾利Ｅ式前半期と後期称名寺・堀之内式期にピークをもち、後期の遺構群は大規模な柄鏡住居や掘立柱建物が確認され注目される。晩期は榛東村茅野遺跡が著名で、後晩期は標高の高いエリアへ移動する傾向を指摘できるのかも知れない。

弥生時代　本遺跡の南方、午王頭川の対岸にある前橋市清里庚申塚遺跡（７）があり、県内を代表する中期後半の環濠集落であることが知られている。

古墳時代　前期の遺跡は少ないが、これは当該期の開発が稲作志向であった為、高台である本地域は開発が遅れたものと思われる。中期も遺跡は少なく、目立った古墳も周辺には無い。後期になると様相が変わる。中期末の榛名山二ツ岳形成期の火山災害以降、一度は原野となるようであるが、6世紀中葉の榛東村高塚古墳（18）と後半の吉岡町大藪城山古墳（17）の、二つの前方後円墳の出現である。共に全長50ｍ強の規模で、陣場岩屑なだれ由来の高台上で扇状地扇端部を一望する堂々たるもので、豊富な埴輪を持つ。榛名山の火山災害後、畑作を中心に新たな開発をこの地へもたらし指導した有力者の奥津城なのであろう。その後7世紀にかけて、この地域では多数の古墳が作られ、群衆墳を形成した。

古墳時代末～飛鳥・白鳳期　特徴的な終末期古墳は、この地域においては特徴的な存在である。吉岡町南下古墳群（16）と三津屋古墳（12）である。南下古墳群は精巧な載石切組積みの横穴式石室をもち、室内に施工時の割り付けにかかるであろう朱線が残るＡ・Ｅ号をはじめ、方墳の可能性があるＥ号、関東では稀な前壁の顕著な石室構造のＢ号など、従前からの古墳の流れとは大きく異なるものである。三津屋古墳は発掘調査によって確実な八角墳であることが判明した稀有な例で、

石室は載石切組積みの横穴式石室と推定されている。八角墳が畿内の天皇陵に採用される墳形であることは言を俟たないが、いずれにせよ南下古墳群と同じく特異なものである。南方３㎞に位置する前橋市総社古墳群や山王廃寺（33）が畿内中枢部の勢力と強い関わりをもって成立することと無関係では無いのだろう。総社古墳群は北関東では唯一、大型方墳が３基継起的に築造されており、蘇我氏との関わりが強いものと考えられている。南下古墳群・三津屋古墳の被葬者も、総社古墳群や山王廃寺を遺した豪族と近縁の人物であったと思われる。他にも清里庚申塚１号墳では石室内から鉄釘がまとまって出土しており、東国では少ない釘付木棺に入ることを許された被葬者像を考えると、遠からず同様の性格を考えることが可能であろう。

奈良・平安時代　古墳時代末以降、集落遺跡が利根川低地を望む扇状地末端に展開する。吉岡町金竹西遺跡（9）や熊野遺跡（10）・辺玉遺跡（11）など、大規模なものが多い。半面、標高の高い本遺跡付近や榛東村域では遺跡数こそ多いが遺構密度は低く、時期的にも大半が平安時代である。そうした閑散とした雰囲気の中、本遺跡北方至近の吉岡町大久保Ａ遺跡（14）は平安時代集落遺跡としては珍しく大規模なもので、調査時には上野国有馬島牧関連の遺跡と目された経緯がある（後に渋川市半田中原遺跡であると確定）。大久保Ａ遺跡の至近には上野国三宮神社が鎮座しており、傍らには地元で「鎌倉街道」と呼ばれる南北方向の古道がある。その古道は上野国総社神社を目指す道とも言われるが、総社神社の所在地は言うまでもなく上野国府推定地である。大久保Ａ遺跡周辺は、国府を中心とした交通網において拠点となる遺跡群なのだろう。また、灰釉陶器・緑釉陶器を副葬した土坑墓が確認された清里長久保遺跡（６）についても、この古道を国府方面に向かった路傍のようであり、その被葬者像を考えるに興味深いものがある。

なお、藤原京木簡「車評桃井里大贄鮎」に見える桃井里がこの地域であると考えることに異論は無いが、具体的な場所は鮎の遡上する利根川近くと考えるのが自然に思う。木簡の時期が評段階であることを考えれば、金竹西遺跡等の利根川低地に望む遺跡群が有望視されるところである。

Tab.1　　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	池端北耕地下ノ割遺跡	21	柿の木坂古墳群
2	七日市遺跡（駒寄ＰＡ）	22	金井古墳群
3	七日市遺跡	23	諏訪古墳群
4	三疋遺跡	24	北寝窪古墳群
5	清里・陣馬遺跡	25	棟高遺跡群
6	清里・長久保遺跡	26	鳥羽遺跡
7	清里・庚申塚遺跡	27	蒼海遺跡群
8	沼南遺跡	28	上野国分尼寺
9	金竹西遺跡	29	国分寺中間地域
10	熊野遺跡	30	上野国分僧寺
11	辺玉遺跡	31	国府推定地
12	三津屋古墳	32	元総社中学校遺跡
13	女塚遺跡	33	山王廃寺
14	大久保Ａ遺跡	34	国分境遺跡
15	大久保Ｂ遺跡	35	北原遺跡
16	南下古墳群	36	下東西遺跡
17	大藪城山古墳	37	蛇穴山古墳
18	高塚古墳	38	宝塔山古墳
19	十二前遺跡	39	愛宕古墳
20	長久保古墳群	40	二子山古墳

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査範囲と基本方針

今回の発掘調査は関越自動車道駒寄スマートインターチェンジ大型車対応化整備事業に伴い実施したもので、駒寄パーキングエリア西側畑地が対象となった。調査区は平成 28 年度に２回実施された試掘調査の結果を基に文化財保護課が設定したもので、図上での面積は 1,585㎡であった。

現地調査は表土以下を重機によって全て掘削し、調査区南側に一括して集積したうえで、遺構確認面となる黒褐色土(基本層序Ⅵ～Ⅴ層)上面を人力で薄く削り込んで遺構を検出、試掘調査結果から想定される竪穴建物跡を中心に掘り下げを行う予定でいた。ところが表土除去を調査区北東隅から開始すると、表土から榛名山二ツ岳噴火の噴出物を主体とする洪水堆積物層(基本層序Ⅲ層)の堆積層が顔を出した。ある程度広げると安定して成層しているように見受けられたので、一応この層の上面を遺構確認面とすべく予定変更した。結果として調査区の大半はこの確認面が正解で、その下のⅣ層を確認面としたのは表土自体の薄い調査区南端のみであった。また、確認面が上がったことで確認遺構数は試掘調査結果にもとづく想定数より多かったが、道路状遺構や大型掘立柱建物の床束等の重要遺構を検出することに成功し、発掘調査成果に華を添えることができたことは、調査担当としては誇るべきことと思っている。

2　調査経過

29 年 8 月 4 日、表土除去開始。当初は全表土を調査区南側へ搬出し排土山を形成する予定でいたが、調査区西側畑の耕作者から枝豆収穫を待ってほしいと道路建設課を通じて申し出があった為、ひとまず調査区北端と北西 1/4 を残した状態で掘削し、収穫後に当該部分の調査を行うこととする。8 月 7 日から数名の作業員を投入して遺構確認を開始、竪穴建物跡の他、大型掘立柱建物跡、土坑多数を検出、ドローンによる簡易空撮を行った。8 月 9 日からは竪穴建物Ｈ－１から掘り下げに着手。8 月 17 日からは作業員を増員して大半の遺構に手を付けた。8 月末には調査区南西 1/4 を排土山とすべく調査を急ぎ、残していた北端・北西 1/4 の表土除去を行った。北端 5 m程度については、北側吉岡町分の未同意地との兼ね合いもあり、道路建設課・文化財保護課と調整した上で今回の調査対象からは除外した。遺構掘り下げがほぼ完了した 9 月 13 日、調査区全景写真をドローンで撮影。9 月 21 日午前には外山政子氏に来跡頂きカマド調査について指導を受け、午後には文化財保護課職員の出演？で大型掘立柱建物跡の写真撮影を行った。

9 月 25 日には文化財保護課による完了検査を受け、その後は竪穴建物跡の掘方調査や掘り残しのピットを調査、10 月 3 日からは資器材の撤収と埋戻しを行い、現地調査を終えた。

整理作業と報告書作成は、調査終了後 29 年 12 月末まで基礎整理、30 年 2 月末まで報告書作成の為のデジタル編集と原稿執筆を実施、3 月頭には印刷業者へ入稿、校正を経て 3 月 23 日に本書刊行となった。(永井)

Ⅳ　基本層序

調査区は現況で南に下がる緩傾斜地であるが、これは耕地整理時の削平と推定され、本来はほぼ水平に近い平坦で、古墳時代の榛名火山活動による火山灰と土石流堆積物に覆われた台地であった。以下、基本層序を説明する。

Ⅰ　灰褐色土　浅間系火山灰を含む砂質土壌。耕作土。

Ⅱ　暗灰褐色土　Ⅰ層に酷似し、耕地整理前の耕作土と推定される。

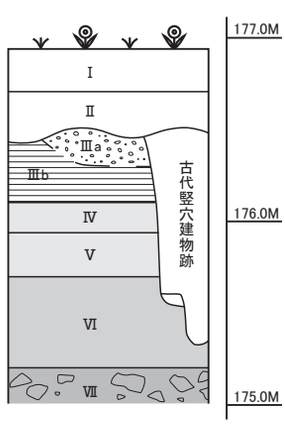
Ⅲ　黄褐色土　下層ｂは榛名山二ツ岳渋川テフラ(ＦＡ)、上層ａは水性堆積の砂礫。

Ⅳ　黒褐色土　浅間Ｃ軽石を多量に含む。いわゆるＣ黒。

Ⅴ　淡黒褐色土　しまり強い。いわゆる黒ボク。

Ⅵ　淡茶褐色土　いわゆるローム。Ⅴ層との層界は漸移的。

Ⅶ　茶褐色土　岩塊を含むローム。陣場岩屑なだれ由来か。



S=1/40

Fig.4　基本土層

Y=-73492
Y=-73488
Y=-73484
Y=-73480
Y=-73476
Y=-73472
Y=-73468
Y=-73464
Y=-73460
X=48144
X=48140
X=48136
X=48132
X=48128
X=48124
X=48120
X=48116
X=48112
X=48108
X=48104
X=48100
X=48096
H-1
H-2
H-3
H-4
H-5
H-6
A-1
A-2
A-3
A-4
A-5
D-1
D-2
D-3
D-4
D-5
D-6
W-1
W-3
W-4
W-5
W-6
X-1
X-2
X-3
B-1
試掘
0
1:200
5m

Fig.5　調査区全測図

Fig.6　池端北耕地下ノ割遺跡　分割全測図①　S=1/100

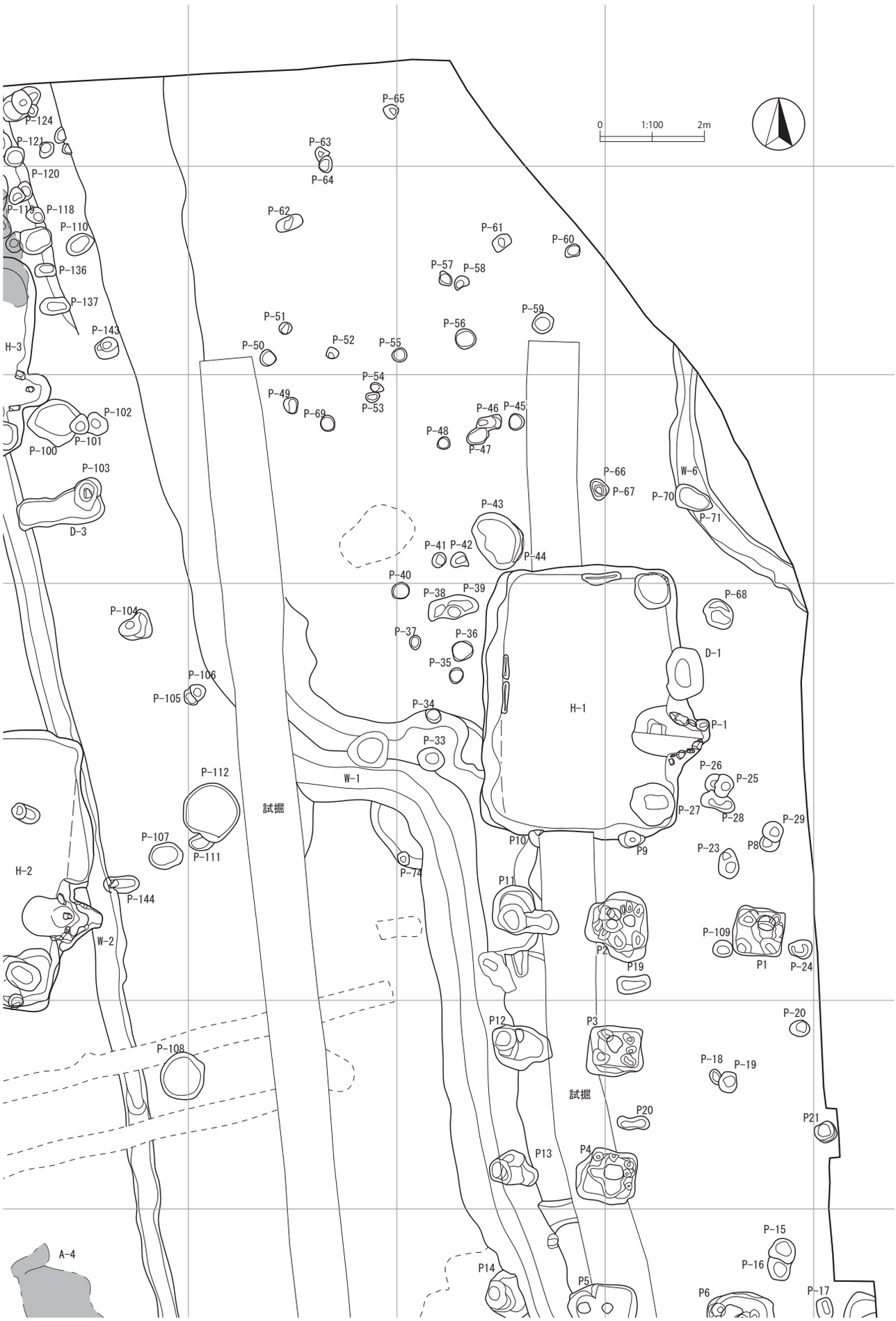


Fig.7　池端北耕地下ノ割遺跡　全測図②　S=1/100

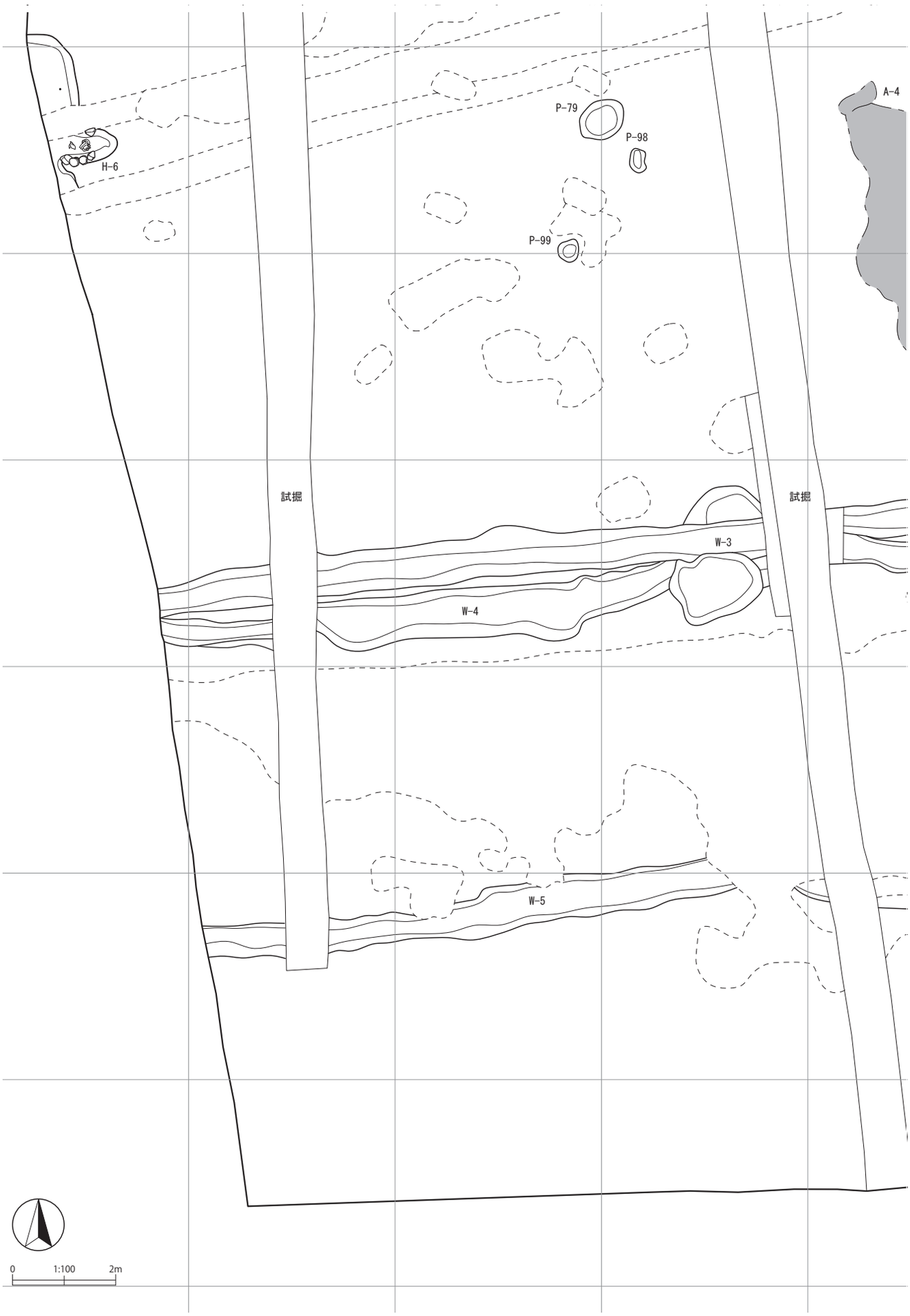


Fig.8　池端北耕地下ノ割遺跡　分割全測図③　S=1/100

Fig.9　池端北耕地下ノ割遺跡　分割全測図④　S=1/100

Ⅴ　遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴建物跡(略称 H)6 軒、奈良時代の掘立柱建物跡(略称 B)1 棟、古代の道路状遺構(略称 A)5 条、古代・近世の溝跡(略称 W)5 条、古代・近世・時期不明の土坑(略称 D)6 基とピット(略称 P)145 基、性格不明遺構(略称 X)3 箇所、遺物については土師器・須恵器・陶器・石製品・鉄製品・銅製品が収納箱 10 箱分出土している。以下、遺構毎に遺物概要も含めて説明する。

（1）竪穴建物跡

1 号竪穴建物跡（Fig10・12・21・PL3・13）調査区北東 X ＝ 48130・Y ＝ -73464 付近に位置し、**主軸方向** N ‐ 93° ‐ E。

竪穴部の横幅が広い長方形プランである。規模は東西軸 3.90 m・南北軸 5.28 m、確認面からの深さ約 0.45 m。D- 1 と重複し、本遺構が切られる。また、中央西寄りを南北に試掘調査時のトレンチが切断している。**覆土**　上層に灰褐色土、下層に暗褐色土を基調とし、全体に AS-C・FA・FP・焼土粒・炭化物を少量含む。

床面　AS-C・FA を含む黒褐色土を貼床状に敷き詰めており、竪穴部中央に硬化面が形成されている。北東側の床面には炭化材が広範囲に確認され、焼失ないしは焼却の可能性がある。

カマド　竪穴部東壁中央南寄りにあり、全長 1.50 m、燃焼部幅 0.65 m、煙道部幅 0.15 m。いわゆる石組カマドで、燃焼部右壁には軟質砂岩と安山岩による石組が確認でき、それぞれ据え穴を掘って設置されている。左壁は石を抜き取られた据え穴のみ確認である。

貯蔵穴　竪穴部南東隅、カマドに対面して右側。長軸 0.9 m、短軸 0.85 m、床面からの深さ 0.19 m。底面四周には木枠痕を思わせるシルエットが確認できた。

竪穴内の土坑　竪穴部北西隅で確認。長軸 0.70 m、短軸 0.65 m、深さ 0.10 m。床面の柔らかい部分を掘方まで掘り過ぎたものを土坑と誤認している可能性もある。

柱穴　確実なものは確認できなかった。掘方調査時に疑わしい小窪みを確認しているが、柱穴と断定するには至っていない。床面段階で置柱の可能性も疑ったが、その痕跡はわからなかった。

壁周溝　竪穴部西・南壁際で断続的に確認。不明瞭ではあるが壁には構築土状の層群(図中の 5 ～ 10 層)があり、その内側末端付近に相当することから壁構造に関係するものと推定される。

掘方　床面からの深さは 0.07 ～ 0.15 m、中央付近は浅く、周辺部は深く掘られている。深い掘り込み部には小窪みが所々確認できた。

出土遺物　覆土中から土師器・須恵器の細片が多数出土している。実測図示し得たものは土師器・須恵器・鉄製品・石製品で計 11 点ある。図示遺物の内 2・4・5・7・8 ～ 11 は覆土中、3 は床面直上、1・6 はカマド内である。1 は平底の土師器坏、2 は須恵器坏、3 は酸化焔焼成の須恵器高台椀、4 は須恵器高台皿で、口縁部の歪みが強く内外面に炭化物付着を認めるが、上記の焼失・焼却の影響と考えられる。5 は耳部片と底部片の図上接合で須恵器の四耳壺と推定した。6 の土師器甕は口縁部が典型的なコの字状を呈する武蔵型甕である。7 ～ 10 は鉄製品で、7 は先端の尖る角棒状で鑿？と考えられ、茎状の根元部分には木質が良く遺っている。8 は紡錘車で、円板状の紡錘車に鉄製の軸部が差し込まれた状態である。軸部には僅かながら巻きつけられた糸が錆化で固定されており、それによって使用時の天地が判明した。9・10 はねじ曲がった鉄釘と推定され、先端が釣針状になっている状態は、建築部材に打ち込まれた際の処理に起因すると考えられる。以上の点から本遺構出土の鉄製品は、鉄資源として収集された故鉄の可能性が想起される。11 は砥石で、一般的な緑色泥岩製だが、提砥としての紐通し穴が開いている。図の上下小口は割れ口がのちの使用によって摩滅した感じで、おそらく使い込まれて痩せた砥石を携行用の提砥に転用したものと推察される。9 の釣針状に曲がった鉄釘が共に出土しており、錆が付着している。その出土状況から調査時には釣針状鉄釘を釣金具とした竿計りの錘「権」の可能性も考えたほどである。

遺構の時期　出土遺物の内、カマド出土の土師器甕の口縁部形状を根拠に 9 世紀後半と推定される。土師器坏・須恵器坏・埦・皿の形態も時期的に齟齬は無い。(原野・永井)

2 号竪穴建物跡（Fig.11・12・22・PL4・13）調査区北東 X ＝ 48128・Y ＝ -73476 付近に位置し、**主軸方向** N ‐ 94° ‐ E。竪穴部の横幅が広い長方形プランであるが、東辺はやや不整形である。規模は東西軸 3.75 m・南北軸 5.14 m、確認面か

らの深さ約 0.45 m。古代の溝跡である W-2 と重複しており、本遺構が切っている。また、西辺南半～南西隅を試掘調査時のトレンチが切断しており、ほぼ床面までを失っている。**覆土**　上層に灰褐色土、下層褐色土を基調とし、全体に AS-C・FA・FP・焼土粒・炭化物を少量含む。

床面　AS-C・FA を含む黒褐色土を貼床状に敷き詰め、竪穴部中央からやや東南寄りにかけて硬化面が形成されているが、北辺と西辺に沿った 1 m強の L 字状の範囲はやや柔らかい。

カマド　竪穴部東壁南寄りにあり、全長 1.52 m、燃焼部幅 0.7 m、煙道部幅 0.26 mを測る。石組構造で、燃焼部右壁に安山岩河原石が 2 石、左壁に 1 石を認めるが、右壁手前の 1 石のみが設置状態を保っていると判断された。右壁のもう 1 石は一度抜いたが近い位置に戻したような雰囲気である。左壁は基本的に破壊されたと判断されるような状態である。支脚は棒状の河原石を燃焼部中央に掘り据えているが、その下少しずれた位置から小ピットが確認されたことから、支脚の位置を動かす改変を経ているらしい。

貯蔵穴　竪穴部南東隅、カマドに対して右側にある。長軸 1.15 m、短軸 0.95 m、床面からの深さ 0.65 m。一段低い不正方形の中に楕円形にもう一段深い穴がある二段構造で、後述するように柱穴と重なる。

柱穴　4 口を確認した。床面段階ではわからず、掘方調査時に確認した。特に南壁に喰い込んだ P1・2 については、調査終盤に壁をダメ押しして確認したもので、共に竪穴内側に硬化部分をもち、特に貯蔵穴と重なる P1 では、柱の角度調整と安定を図るためと思われる飼い石？も確認された。

壁周溝　注意深く精査して検出を試みたが、確認できなかった。ただ、南壁では壁構築土と思われる層群があるので、溝を伴わないで良いような壁構造であったと推定される。

掘方　床面からの深さは深い所で 0.18 m、中央付近は浅く、周辺部は深く巡り、特に南北は一段と深い。柱穴と判断したもの以外にも、大小の窪みが所々確認できた。

出土遺物　覆土中から土師器・須恵器破片が多数出土した。実測図示したものは土師器・須恵器・鉄製品で計 10 点ある。ほとんど全て覆土中の出土で、北東方向から流れ込んだような出土状態であった。12・13 は土師器坏片、14 ～ 16 は須恵器坏、17 は軟質焼成の須恵器高台埦、18 は須恵器高台皿、19・20 は土師器甕で口縁部が典型的なコの字状を呈する武蔵型甕である。21 は重量のある滴状の鉄塊系遺物で、製品では無いと思われる。中心から分解するような錆び方からは、鋳造時に鋳型からこぼれたもののように思われた。いずれにせよ、鉄資源としてもたらされた可能性が高い。

遺構の時期　出土遺物の内、土師器甕の口縁部形状や須恵器坏の底部形状を根拠に 9 世紀中葉～後半と推定される。H-1 より僅かに古いと思われる。

３号竪穴建物跡（Fig.13・22・23・PL5・13）調査区北東 X ＝ 48136・Y ＝ -73476 付近に位置し、**主軸方向** N ‐ 93° ‐ E。

竪穴部の横幅が広い長方形プランであるが、南辺はやや不整形で棚状に中段をもっている。規模は東西軸 3.25 m・南北軸 4.5 m、確認面からの深さ約 0.6 m。古代の溝跡である W-2 と、同じく古代の道路状遺構 A -3 と重複し、W -2 を切り、A -3 に覆われている。また、竪穴部北寄りに床面まで達する攪乱がある。**覆土**　上層に灰褐色土を基調とし、全体に AS-C・FA・FP・焼土粒・炭化物を少量含む。堆積層は断面を見る限り不自然で、人為的な埋め戻しを想起させる。

床面　AS-C・FA を含む褐色土を貼床状に敷き詰め、竪穴部中央からやや南寄り、すなわちカマド前を中心に硬化面が形成されており、反面で北辺はやや柔らかい。

カマド　竪穴部東壁南寄りにあり、全長 0.8 m、燃焼部幅 0.5 m、煙道部幅 0.2 mを測る。焚口部に凝灰岩質泥岩の切石と粘質シルトブロックを鳥居状に組み合わせた構造で、架設材は風化によって平面的な形状は不鮮明な状態であったが、土層断面では確実に把握された。支脚は燃焼室やや奥左寄りに円柱状粘質シルトを掘り据えており、その手前には土師器甕がほぼ完形で落ち込んでいた。また、右壁は黄褐色粘質土を貼り付けた二重構造となっており、最低一回の改修が想定可能であった。本カマドは上記のように極めて残存状態の良いものであり、廃絶時の破壊は想定し難いが、カマド上を覆うように、12 個の大中石材（安山岩河原石・塊石）からなる集石によって覆われた、かなり特徴的な状態が看取された。集石手前の床面からは曲げられた長身の刀子が一点出土しており（30）、儀礼的な雰囲気を醸し出している。

貯蔵穴　竪穴部南東隅、カマドに対して右側に 2 口ある。調査時には判然としなかったが、おそらくカマドの改修前後に対応するものと考えられる。共に楕円形で小さいものであった。

柱穴　床面では明確なものは確認できず、掘方調査時に検出を試みたもののはっきりしなかった。竪穴外にもそれなりに注意を払ったが、検出できなかった。おそらく竪穴内床面への置柱構造であったと思われる。

壁周溝　注意深く精査したものの確認できなかった。西壁では壁構築土と思われる層群が断面観察されたので、溝を伴わない壁構造であったと推定される。

掘方　床面からの深さは深い所で 0.15 m、中央付近は浅く、周辺部は深く巡る。竪穴部の南・西壁との間には、壁構築土下に相当する部分の掘方は浅く、掘りあがった結果では段となって巡っていた。

出土遺物　覆土中から土師器・須恵器破片が少量出土した。実測図示したものは土師器・須恵器・灰釉陶器と鉄製品で計 9 点ある。床面近くとカマド内からの出土で、22 ～ 24 は土師器坏、25 ～ 27 は須恵器坏、28 は灰釉陶器瓶類(浄瓶？)破片、29 は武蔵型甕、30 がカマドを覆う集石手前から出土した刀子である。24 は小破片だが墨書(文字不明)が確認されたので図示した。

遺構の時期　土師器甕の口縁部形状や土師器・須恵器坏の形状を根拠に 9 世紀中葉と推定される。H-1 より一段階古いと思われる。

４号竪穴建物跡（Fig.14・23・PL6・13）調査区北東 X ＝ 48132・Y ＝ -73482 付近に位置し、**主軸方向** N ‐ 73° ‐ E。竪穴部の横幅が広い長方形プランであるが、東辺はやや不整形である。規模は東西軸 3.55 m・南北軸 4.18 m、確認面からの深さ約 0.5 m。カマド先端を試掘調査時のトレンチで失っている。**覆土**　上層に灰褐色土、下層褐色土を基調とし、全体に AS-C・FA・FP・焼土粒・炭化物を少量含む。

床面　AS-C・FA を含む褐色土を敷き詰め、竪穴部中央わずか南寄りに硬化面が形成され、北縁部に転ばし根太圧痕と思しき東西方向の浅い窪みが観察された。従って北辺硬化面外は板貼り床の可能性が指摘できる。

カマド　竪穴部東壁南寄りにあり、煙道部を試掘トレンチで完全に失っている。残存長 0.78 m、燃焼部幅 0.62 mを測る。焚口部に門柱状に石を用いており、右に軟質砂岩の切石、左壁に河原石が設置状態で検出されたが、双方の下手前からは据え穴が確認されたことから、最低一回改修されたと考えられる。なお、新段階は全体に嵩上げした状態で、焚口部手前には断面で二枚の床を認めた。支脚は抜き取られたらしく、確認できなかった。

貯蔵穴　竪穴部南東隅、カマドに対し右側にある。一段低い不正方形中に楕円形にもう一段深い穴がある一般的な構造であるが、断面観察では床面を違えて二重になっており、新段階は浅い皿状のようである。

柱穴　6 口を確認した。床面段階ではわからず、掘方調査時に確認した。P1 は貯蔵穴と重なっており、切り合い関係不明であるが、Ｐ 1・2 は新段階のカマド・貯蔵穴に対応するものと推定される。

壁周溝　注意深く精査して検出を試みたが、確認できなかった。壁構築土と思われる層群は判然とせず、溝を伴わない、例えば板状のものを立てかける程度の壁構造であったと推定される。

掘方　床面からの深さは深い所で 0.15 m、中央付近は浅く、周辺部は深く巡っているが、その深い部分は北から西辺にかけて幅 1 m弱、竪穴壁から逃げる。カマド・貯蔵穴から想定される新旧に対応すると考えれば、竪穴部面積の狭い旧段階から、北・西へ拡張した新段階と説明できる。

出土遺物　覆土中から土師器・須恵器破片が少量出土した。実測図示したものは土師器・須恵器・鉄製品で計 7 点ある。ほとんど全てが南壁沿いからの出土で、完形の土師器坏 31 は貯蔵穴上、須恵器坏 34 や刀子 37 は壁に引っかかったような出土状態で、竪穴壁と屋根の間の棚から転落したかのようである。31・32 は土師器坏、33 は土師質の内面黒色研磨の特異なものであるが、これは後述の 1 号掘立柱建物出土蓋と組む坏身の可能性を考え小破片を図示した。34・35 は須恵器坏、36 は三ケ月高台の灰釉陶器埦底部破片、37 は刀子である。

遺構の時期　須恵器坏・灰釉陶器埦の底部形状を根拠に 9 世紀前半～中葉と推定される。H-3 より僅かに古い段階と思われる。（永井）

５号竪穴建物跡（Fig.15・23・PL7・13）位置　X ＝ 48,132、Y ＝ -73,488　**主軸方向**（N ‐ 86° ‐ E）。規模は東西軸 2.95 m・南北軸 4.00 m・深さ 0.42 m。竪穴部横幅が広い長方形プランで、比較的整ったものである。P-78 と重複し、新旧関係は P-78 ＞本遺構。東壁の大半とカマドの上大半を試掘トレンチで失っていた。**覆土**　暗黄褐色を基調とし、AS-C 粒子・FA ブロックを含む。上層にはやや多く FA ブロックを含む。

床面　竪穴部中央付近を中心に西半にかけて広く硬化面が形成されているが、さほど硬質なものではない。一方でカマド前を含む東半分はあまり硬くない。

カマド　東壁中央わずか南寄りにある。燃焼部から煙道部にかけて試掘トレンチで大半を消失しているが、煙道部先端は

かろうじて残存していた。全長 1.90 m、燃焼部幅 0.80 m、煙道部幅 0.30 m。両袖ともに破損。燃焼部両壁は破損が著しいものの部分的に軟質砂岩が確認でき、それぞれ据え穴を掘って設置されていた。

貯蔵穴　竪穴部北東隅で確認。長軸 0.55 m、短軸 0.50 m、深さ 0.18 m。掘方が深い部分でもあり、形態についてはやや心許ない部分がある。

柱穴　床面では確認できなかったが、掘方で柱穴と思われる浅い窪みを 4 カ所確認した（P 4 ～ 7）。また、壁面に洞状に穿たれた深さ（奥行）40㎝程度のピットが北壁中央（P3）・南壁中央（P1）・西壁南隅（P2）に確認されたが、これは柱穴ではなく、可能性としては建物の廃絶後に動物が巣穴を掘った可能性が考えられる。

壁周溝　注意深く精査して検出を試みたが、確認できなかった。壁構築土と思われる層群は判然とせず、溝を伴わない、例えば板状のものを立てかける程度の壁構造であったと推定される。

掘方　掘方の深さは 0.06 ～ 0.20 mをはかり、中央付近は浅く、周辺部は深く掘られている。柱穴と推定できる窪みが適所から 4 カ所確認できた。

出土遺物　覆土中から 38 ～ 40、カマド内から 41 が出土した。38 の土師器坏は口縁部が内反、体部外面に指頭痕、底部弱丸底。39 の須恵器坏は口縁から体部に直線的、底部回転ヘラ切り。40 の須恵器坏は口縁～体部にかけて内湾し、口唇部で外反。底部回転糸切り離し。41 の土師器甕は口縁部が弱い「く」字状を呈する。

遺構の時期　カマド出土の甕口縁部形態を重視すれば、9 世紀前と推定される。H-3 より一段階古い時期と思われる。

６号竪穴建物跡（Fig.16・23・PL8・14）位置　X ＝ 48,116 ～ 48,121、Y ＝ -73,489 ～ 73,491　**主軸方向**（N - 88° - E）。大半が調査区外のため不明な点が多いが隅丸長方形プランと思われ、**規模**　南北検出長 3.30 m・深さ 0.45 m。近年の攪乱が二条東西に横切り、南東隅とカマド左壁を失っている。**覆土**　上層灰黄褐色、下層は暗褐色を基調とし、AS-C・FA 含む。

床面　作業員への指示不徹底で、床面で止まらず掘方まで一気に掘ってしまい、完掘後に土層断面で認識。カマド前付近には複数面の貼床が確認された。

カマド　竪穴部東壁中央で確認。燃焼部左壁は攪乱により破損。全長 1.30 m、燃焼部幅（0.60）m。燃焼部右壁と左壁一部には軟質砂岩（S 1 ～ 3）と安山岩（S 4 ～ 6）による石組が確認できた。当初の床面誤認からカマド使用面の認識も誤り、結果として石組が浮き上がった状態で掘りあがったが、その時点で残る土層断面を観察した限り、カマドは嵩上げによる改修を経ており、石組は新段階の造作と結論付けられる。なお、掘方調査時に石の据穴が確認できなかったことから、旧カマドは石組ではなかった可能性もある。

貯蔵穴　床面の誤認と攪乱による破壊から平面的には確認できなかったが、土層断面にはそれと思しき窪み（12 層）が確認できるので、本来はカマド右側にあったことがわかる。

柱穴・壁周溝　確認できず。なお、壁際には壁構築土と思われる層群がある。

掘方　床面からの深さは 0.13 mをはかり、全体的に平坦に掘られている。小穴跡が所々確認できた。

出土遺物　覆土中から 42・43・45・47、カマド内から 44・46・48 が出土した。42 の土師器坏は口縁部が外反、体部外面に指頭痕、底部弱平底。43 ～ 45 の須恵器坏は口縁から体部が直線的、底部回転糸切離し。46 は灰釉陶器。47 の須恵器長頸瓶は高台部が逆八ノ字状を呈す。48 の土師器甕は口縁部がくノ字状を呈し、最大径は胴部である。

遺構の時期　土師器甕の形態から 9 世紀初頭頃と考えられ、竪穴建物中最も古い。（原野・永井）

（2）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（Fig.17・18・PL9・14）位置　X ＝ 48,116 ～ 48,128、Y ＝ -73,460 ～ 73,464、**主軸方向**（N - 5° - E）。東半が調査区外となる。**規模**　南北 11.6 m。P 1 ～ 7 が身舎柱穴、P 8 ～ 18 が廂柱穴、P 19 ～ 21 は床束柱穴と考えている。以下、煩雑ではあるが各柱穴について説明する。

P 1　東西 1.0 m南北 0.9 m、確認面からの深さ 0.7 mの整った正方形土坑状の柱穴である。底面中央には本来の柱据穴とみられる丸い窪み、四隅は掘方として窪み、中央やや北寄りには底面から少し浮いた状態で柱当たりの硬化部分が認められた。堆積土は 1 ～ 7 層が抜き取り層群、8 ～ 15 層が埋填土層群と判断されるが、その層界は不鮮明で、埋填土のしまりもさほどではない。おそらく柱穴の形を崩すことなく柱を抜き取り、再度柱を立て埋填した結果と思われる。柱当りとした硬化部分は新段階のものと考えられる。

Ｐ２　東西 1.2 m南北 1.3 m、確認面からの深さ 0.7 mのやや不整形土坑状の柱穴で、西端は試掘トレンチによって上端を破壊されている。柱穴２基の重複及び柱抜き取り時の上端の崩れが重なった結果のようである。底面は掘方状に隅を中心に小窪みがあり、中央やや北寄りと北西寄りには底面から少し浮いた状態で柱当たりの硬化部分が２カ所認められた。堆積土は１～11 層が抜き取り層群で１～５層の新段階と６～11 層の古段階に、12 ～ 14 層が埋填土層群と判断される。抜き取り新段階層群はかなり乱れており、抜き取りがスマートでなかったことを窺わせる。柱当りの硬化部分２カ所の前後関係については、現場段階では明らかにしえなかった。

Ｐ３　東西 1.1 m南北 1.0 m、確認面からの深さ 0.75 mの整った正方形土坑状の柱穴であるが、西・南辺の上縁が面取りされたかのように削れており、抜き取りの影響と思われる。なお、西辺は試掘トレンチによって上面を失っている。底面の四隅は掘方として窪み、中央やや北寄りに底面から少し浮いた状態で柱当たりの硬化部分が認められた。堆積土は１層が抜き取り、２～６層が埋填土層群と判断され、その層界は比較的明瞭であった。抜き取りとした１層は新段階の柱痕と考えられるが、埋填土層群も内側傾斜なので、基本的には古段階柱の抜き取りでもあると考えられる。

Ｐ４　東西 1.1 m南北 1.0 m、確認面からの深さ 0.6 mのやや不整形の正方形土坑状の柱穴で、西辺上縁が面取りされたかのように削れ、東南隅上端は内側に突出しており、抜き取りと建て替えの影響と思われる。なお、上半の過半は試掘トレンチによって失っている。底面は中央が弱く不定形に窪み、そこのやや北寄りに柱当たりの硬化部分が認められた。堆積土は１層が抜き取り、２～５層が埋填土層群で、抜き取りとした１層は新段階柱痕と考えられるが埋填土層群も内側傾斜で、基本的には古段階柱の抜き取りの影響と考えられる。

Ｐ５　東西 1.3 m南北 1.05 m、確認面からの深さ 0.55 mの不整方形土坑状の柱穴で、方形土坑と楕円形土坑が重複したような形状である。上半の大半を試掘トレンチで失い、西端は近世溝跡であるＷ -1 に切られる。底面は平坦で、中央は全体的に硬く叩きしめを思わせる。その硬化した範囲の中央と、楕円形土坑状に張り出す部分の底面中央の２ケ所、柱当たりの硬化部分が認められた。堆積土は１～７層が抜き取りないしは新段階柱穴関係層群、８～ 10 層が埋填土層群と判断される。

Ｐ６　東西 1.3 m南北 1.1 m、確認面からの深さ 0.6 mの隅丸方形土坑状の柱穴である。底面中央には本来の柱据穴とみられる不正円形の窪みと、その周りには不定形な窪みがあり、抜き取り時の鋤先の痕跡と思われる。また、西辺下には小穴状の部分があるが、これについても柱抜き取りに関係するものと思われる。中央やや北西寄りには底面から少し浮いた状態で柱当たりの硬化部分が認められた。堆積土は１～４層が抜き取り層群、５～ 12 層が埋填土層群と判断されるが、その層界は不鮮明であった。埋填土は内側傾斜で、旧段階の柱穴を崩すことなく柱を抜き取り、再度柱を立て埋填したものと推定される。

Ｐ７　おそらく半分近く調査区外となり、南北 1.4 m、確認面からの深さ 0.8 mの不整形土坑状の柱穴である。底面中央には本来の柱据穴とみられる不正円形の窪みと、その周りには不定形な窪みがあり、抜き取り時の鋤先の痕跡と思われる。中央には底面から少し浮いて柱当たりの硬化部分が認められた。堆積土は１～６層が抜き取り層群、８～ 12 層が埋填土層群と判断されるが、その層界は不鮮明であった。埋填土は内側傾斜で、旧柱を抜き取った後に再度柱を立てたと推定される。

Ｐ８～10　小ピットであり、Ｐ８は２基が重複した状況であるが、これは抜き取りに関係する可能性がある。また、Ｐ９・10 は平安時代竪穴建物跡であるＨ -1 と重複し、切られている。

Ｐ 11 ～ 14　西側にスロープ状の張り出しをもつ不定形土坑状の柱穴で、全て近世溝跡Ｗ -1 や攪乱と重複し、それによって検出が遅れた関係から十分な準備無く掘りあげてしまった。結果として土層の検討を不能としてしまったが、掘りあがった形状からは新旧二時期の重複と理解できる。Ｐ 12 には柱当たりと思われる硬化部分が認められたが、これについては位置関係から、新段階のものと推定される。

Ｐ 15 ～ 18　小ピットであり、深さもまちまちである。Ｐ 15・16 は近接した同規模同深度のもので、廂の隅を構成する同一の柱と考えられる。おそらく補修・補強の結果と思われる。Ｐ 17 との間にも１基の柱穴を想定できるが、その位置にはＷ -1 があるために消失したと考えられる。Ｐ 19・20　束柱穴と考えられ、共に確認面からの深さは 0.1 mに満たないものである。身舎を構成する柱穴であるＰ２・３・４の間に位置する。Ｐ４・５間にも同様のものが想定されるが、試掘トレンチによって消失したと考えられる。Ｐ 21　束柱穴と考えられ、確認面からの深さは 0.1 mに満たない。位置関係からみて建物のちょうど中央に位置すると考えられる。

出土遺物と遺構の時期　少量の遺物がＰ3・６から出土した（49 ～ 53）。特に 50 ～ 53 から図上復元した蓋は内黒の特異なもので、対応する身はＨ-4 の 33 と思われる。８世紀前半と思われる。

（3）道路状遺構

1号道路状跡（Fig.9・PL11）位置　X＝48,104、Y＝-73,460、**主軸方向**（N‐16°‐W）。**規模**　南北2.3 m、幅0.5m。古代溝跡であるW-5の上に乗り、近世溝跡W-1西側に平行する位置関係。硬化面のみ残存で下部遺構は認められず、自然発生の道と考えられる。覆土を失っており、出土遺物も無いことから、時期は不明である。

2号道路状跡（Fig.9・PL10）位置　X＝48,100～48,108、Y＝-73,464～73,468、**主軸方向**（N‐17°‐W）。**規模**　南北6.5 m、幅1.4mの浅い断面鍋底の溝状である。古代のW-5を切っており、X-3に切られる。**覆土**　風成堆積の暗褐色土で浅間B軽石の混入は確認できない。底面に幅0.5m程度の硬化面が厚く形成されており、その下にはピット状に窪む部分もあることから、ある程度のメンテナンスが行われていたことを窺わせる。出土遺物は無い。本遺構の時期は堆積土の特徴から古代と考えられるが、重複遺構から絞り込めば古代末頃であろう。

3号道路状跡（Fig.20・PL10）位置　X＝48,136～48,140、Y＝-73,476、**主軸方向**（N‐19°‐W）。**規模**　南北4.5 m、幅0.6mのごく浅い幅広の溝状で、北は調査区外となる。古代のW-2・H-3を覆っている。**覆土**　風成堆積の暗褐色土で、浅間B軽石は確認できない。底面に幅0.4m程度の硬化面が風成層を挟んで最低3面形成されており、それを剥がすと多数の小窪み状のピットが確認された。ピットは層位的関係から本遺構の一部として考えられるもので、道路のメンテナンスにかかる遺構と考えられるが、時間的制約から詳細な調査が行えなかった点は残念である。調査区北側未買収地での調査に期待したい。遺物は、最新の硬化面上に多数の礫が覆うように分布する間から、数点の土器破片が出土している。全て図示に耐えない破片であるが、平安時代と考えられる須恵器甕・坏の小破片と共に、土師質焼成の甕？口縁部があり、中世初頭まで下る可能性がある。本遺構の時期は、貧弱な出土遺物を根拠とすれば古代末～中世と考えられる。覆土中に浅間B軽石が確認できなかったのは、降下を挟み道路が維持管理されていたからとも考えられる。

4号道路状跡（Fig.7・8・9・PL11）位置　X＝48,112～48,120、Y＝-73,472～73,476、主軸方向（N‐25°‐W）。規模は南北6.8 m、幅1.3m。重複遺構は無く、硬化面と硬化面下の変色域が残存していた。その範囲はメインとなるaと、枝分かれ(あるいは合流)するb（N‐7°‐W）が認識できたが、前後関係を有するのか同時存在なのかは不明である。出土遺物も無く、時期は不明である。

5号道路状跡（Fig.6・20・PL11）位置　X＝48,136～48,140、Y＝-73,476～73,480、主軸方向（N‐33°‐W）。規模は南北5.0 m、幅1.7m。部分的な硬化面の残存列として認識したもので、その一部は古代のH-3上層にも及んでいる。3号道路状遺構の西隣に近接しており、何らかの関係があると思われるが、直接的な重複関係等があるわけではない。出土遺物も無く、時期は不明である。

（4）溝跡

1号溝跡（Fig.7・9・PL11）調査区西寄りを南北に貫き、X＝48,128、Y＝-73,468付近でクランクする。**主軸方向**（N‐16°‐W）。H-1・B-1を切り、試掘トレンチに切断されている。断面形状は概ね逆台形。**覆土**　淡黒灰色でしまりは弱い。遺物は陶磁器・近世土器・煙管が出土している。近世の畑地区画溝と考えられるが、道路状遺構と並行関係にあり、地割としては古代末以降の古いものを踏襲している点は興味深い。

2号溝跡（Fig.6・7・9・19・20・PL11）調査区ほぼ中央を南北に貫く。**主軸方向**（N‐12°‐W）重複する全遺構に切られ、確認遺構中最古、道路状遺構と並行ないしは重複している。幅は平均0.5m、断面形状は逆台形。**覆土**　砂礫を多量に含み硬い。遺物は土師器片が出土し、甕片の特徴からは奈良時代末～平安時代初頭に遡ると思われる。

3・4号溝跡（Fig.8・9・PL11）共に調査区南寄りを東西に貫き、重複を繰り返す。出土遺物は無いが、しまりの弱い淡

暗灰色の覆土からは、共に近世の根切り溝と考えられる。

5号溝跡（Fig.8・9・19・PL11）調査区南端近くを東西に貫き、やや蛇行する。W-2を切り、A-1・2、W-1に切られ、X-3とは同一遺構と思われる。出土遺物は無いが、砂礫を多く含むW-2と似た覆土から近い時期と思われる。

6号溝跡（Fig.7・PL11）調査区北西、調査区壁にかかる円形周溝の一部と思われる。砂礫を多く含むW-2と似た覆土で、土師器細片がわずかに出土している。平安時代と考えられる。（永井）

（5）土坑・ピット・性格不明遺構

土坑（Fig.7・9）

6基が検出された。D- 1は平面が楕円形を呈しH-1を切る。D-2は台形を呈し比較的規模が大きいもので、A-2を切っている。D-3は長方形で、W-2とP-103と重複し、W-2‹D-3‹P-103である。D-4・5は長方形、6は楕円形を呈す。それぞれH-3と重複し、D-4・5・6が新しい。D-5・6からは土師器片及び須恵器片が出土しているが、H-3に伴う遺物が流れ込んだ可能性がある。なお、各土坑の詳細は一覧表に示す。

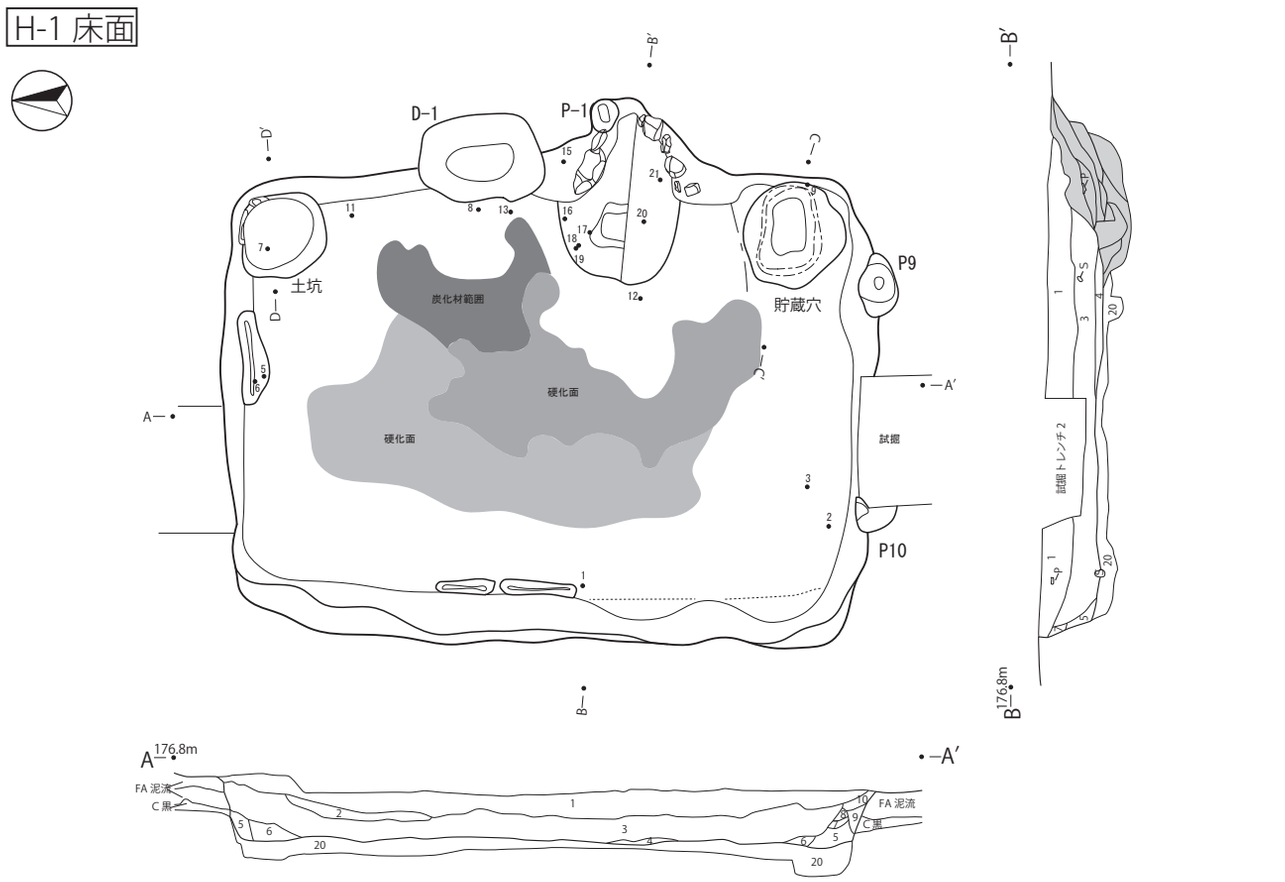
ピット（Fig.6・7・8・9・PL12）

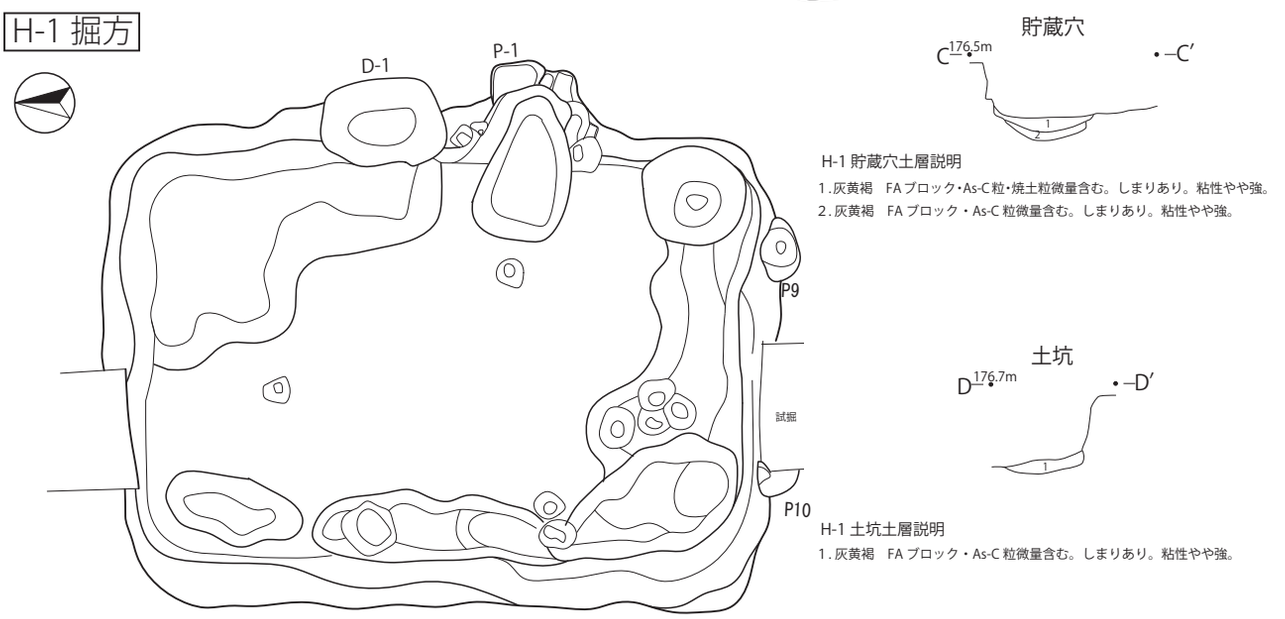
ピットは総数145基が検出された。形状は円形・楕円形・隅丸方形が大部分を占めるが、一部不整形も検出。分布状況は調査区北側、とくに北東側で多く検出された。P-12・24・25・27・28・38・43・74～77・79・81・90・100・108・109・110・124・144から土師器や須恵器などの古代の遺物が検出されている。掘立建物となりうるピットは確認できなかったが、出土遺物やそれに近い並びの様相見せる柱穴は多数あり、何棟かの建物があったと推定できる。また、H－2周辺では大きなピット（P -75・76・77・79・107・108・112）が検出されており、それぞれ単独の位置関係を持つ、須恵器、土師器などが出土しており、古代の様相を示すが、用途は不明である。そのほかのピットについては大部分が不明である。なお、各ピットの詳細ついては一覧表に示す。

P-110（Fig.20・24） 3号道路状遺構内にあるP-110からは、土師器坏の完形品が特異な状態で出土している。土塊を入れて逆位に伏せ、ピット内へ埋設されたかのような出土状態で、地鎮や道路に関係する呪い行為を思わせる。（原野・永井）

性格不明遺構（Fig.9・19）

不定形な落ち込みを性格不明遺構とした。X-1は最終的に攪乱と判断したので欠番、X-2・3は2号道路状遺構A-2と重複関係にある。X-2はピットの集合体のようなものでA-2を切ることから中世以降、X-3はA-2に切られ、古代溝跡W-5の一部と考えられる。多量の砂が堆積する断面皿状のもので、須恵器大甕の破片が出土している。溝に伴う水溜め施設のような性格が考えられる。（永井）





H-1 貯蔵穴土層説明

1. 灰黄褐　FA ブロック・As-C 粒・焼土粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。
2. 灰黄褐　FA ブロック・As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。

H-1 土坑土層説明

1. 灰黄褐　FA ブロック・As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。

H-1 土層説明

1. 灰黄褐　As-C 粒・炭化物微量、砂礫多量含む。しまりあり。粘性やや強。
2. 灰黄褐　FA ブロック・As-C 粒多量、焼土粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。
3. にぶい黄褐　As-C 粒多量、FP ブロック・砂礫微量、焼土粒・炭化物少量 - 含む。しまりややあり。粘性やや強。
4. 黒褐　FA ブロック・As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性やや強。
5. 灰黄褐　FA ブロック・As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性強。
6. 灰黄褐　FA ブロック・As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性強。
7. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・焼土粒・炭化物微量含む。しまりあり。粘性やや強。
8. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・焼土粒・炭化物微量含む。しまりあり。粘性やや強。 7 層より明。
9. 黒褐　As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。
10. 明黄褐　As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。
20. 黒褐　FA 粒・As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性やや強。

H-1 カマド土層説明 (Fig.12 参照)

11. 黄褐　As-C 粒・炭化物微量、焼土粒少量含む。しまりあり。粘性強。
12. 褐　As-C 粒微量、焼土粒多量含む。しまりあり。粘性強。
13. 赤灰　焼土粒多量含む。しまりあり。粘性やや強。
14. 赤褐　焼土ブロック多量含む。しまりあり。粘性やや強。
15. 褐　FA 粒・As-C・焼土粒粒混在。しまりあり。粘性やや強。
16. 黒褐 (一部青灰)　焼土粒微量含む。しまりあり。粘性強。
17. 褐　FA・As-C ブロック混在、焼土粒微量含む。しまりややあり。粘性やや強。
18. 黒褐　焼土粒微量含む。しまりあり。粘性強。
19. 黒褐　FA 粒・As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性強。

0　1:60　2m

Fig.10　1 号竪穴建物跡（H-1）

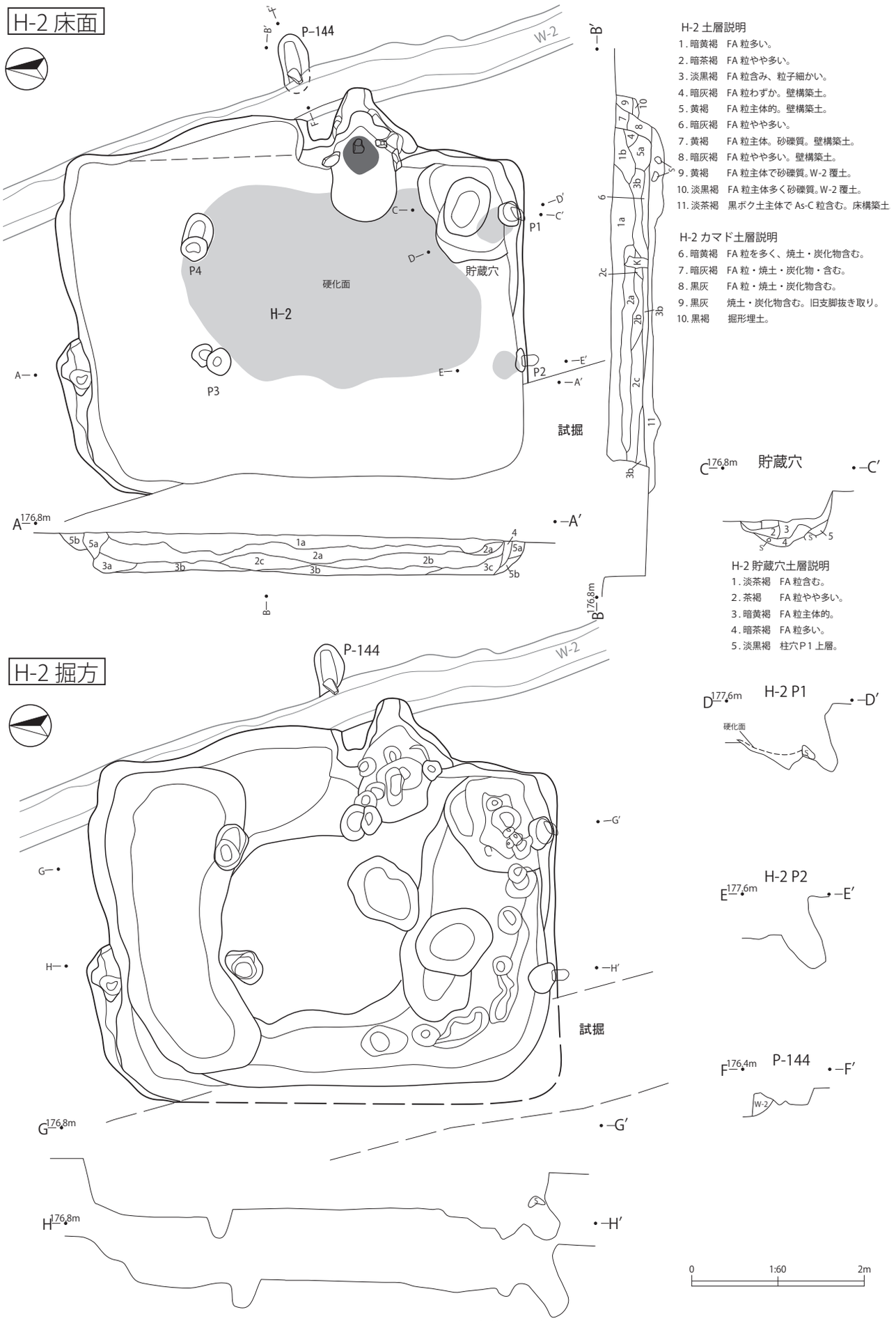
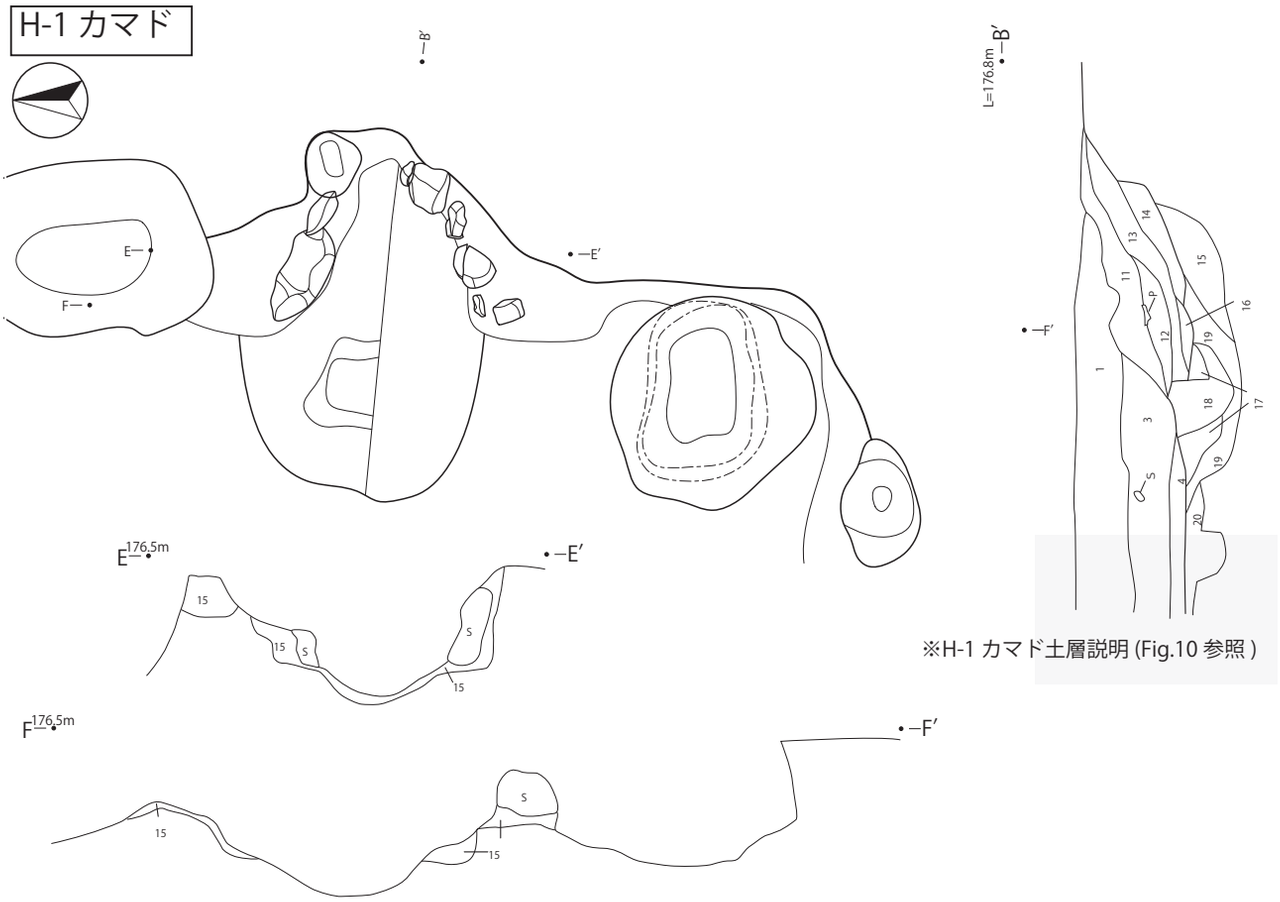
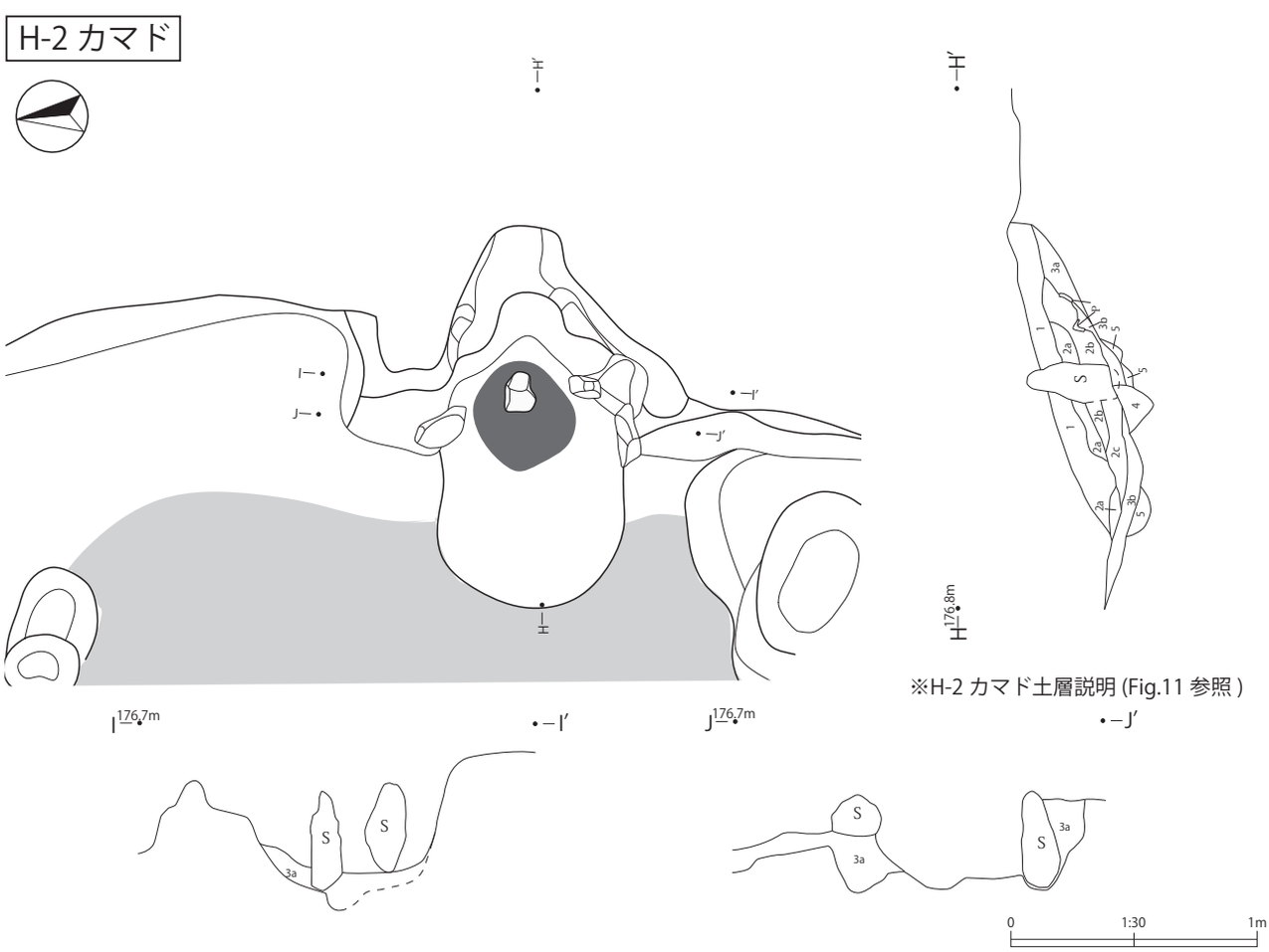


Fig.11　2 号竪穴建物跡（H-2）



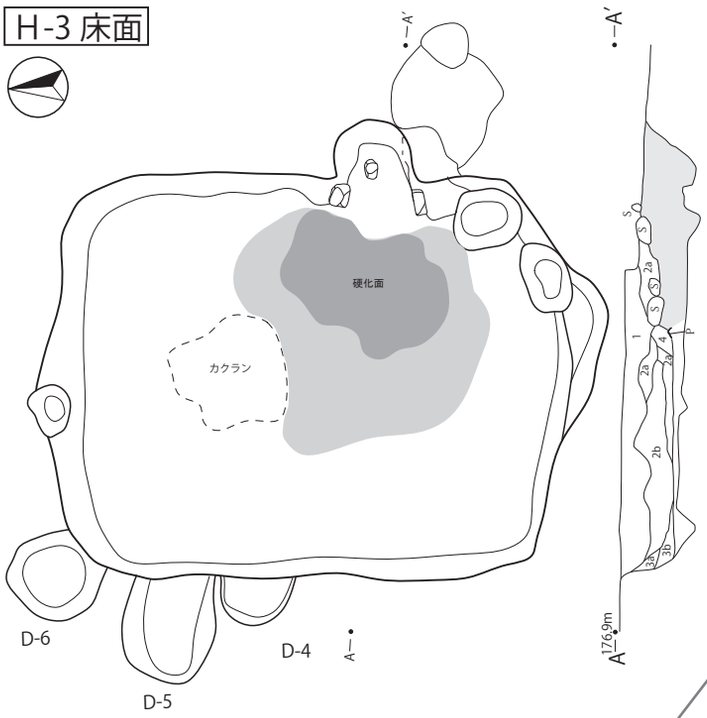
※H-1 カマド土層説明 (Fig.10 参照)



※H-2 カマド土層説明 (Fig.11 参照)

Fig.12　1・2 号竪穴建物跡 カマド（H-1・2)

H-3 床面



H-3 土層説明

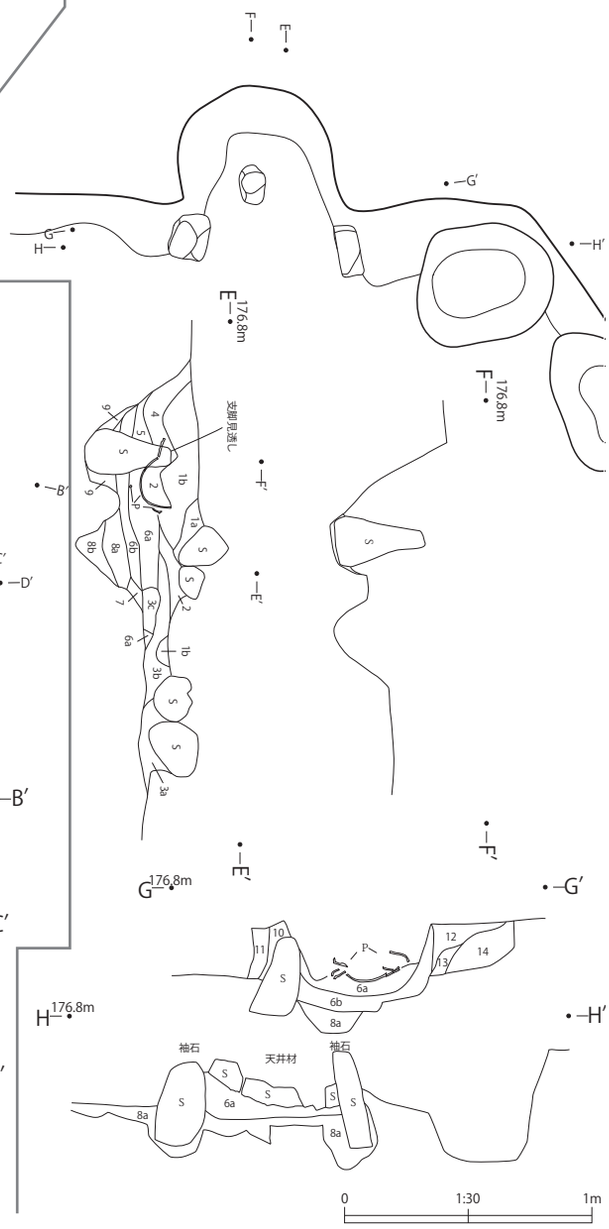
1. 明茶褐　FA 粒子斑に多量含む。
2. 暗茶褐　黒色土多く FA 粒子含む。
3. 黒褐　黒色土主体に FA 含む。壁構築土崩落。
4. 暗茶褐　1 層に似るが焼土ブロック含む。カマド関係層。

カマド

H-3 カマド土層説明

1. 暗黄褐　FA ブロック多量。
2. 灰褐　焼土粒・炭化物粒少量含む。
3. 明茶褐　FA・焼土・炭化物粒子含む。
4. 淡赤褐　焼土粒多量含む。
5. 暗灰　炭化物粒含む風成。
6. 暗黄褐　黄色粘土・焼土含む。
7. 明茶褐　FA 粒含む。
8. 暗赤褐　焼土・炭化物多量含む。
9. 明茶褐　FA 粒含む。
10. 暗黄褐　砂礫を含む粘質土。カマド袖。
11. 黄褐　粘質土。カマド袖。
12. 暗黄褐　粘質土ブロック主体。旧カマド材。
13. 暗赤褐　焼土粒主体。旧カマド関係層。
14. 暗茶褐　FA・焼土・炭化物・黒色土粒含む。

カマド上面の集石と刀子（北西～）



掘方

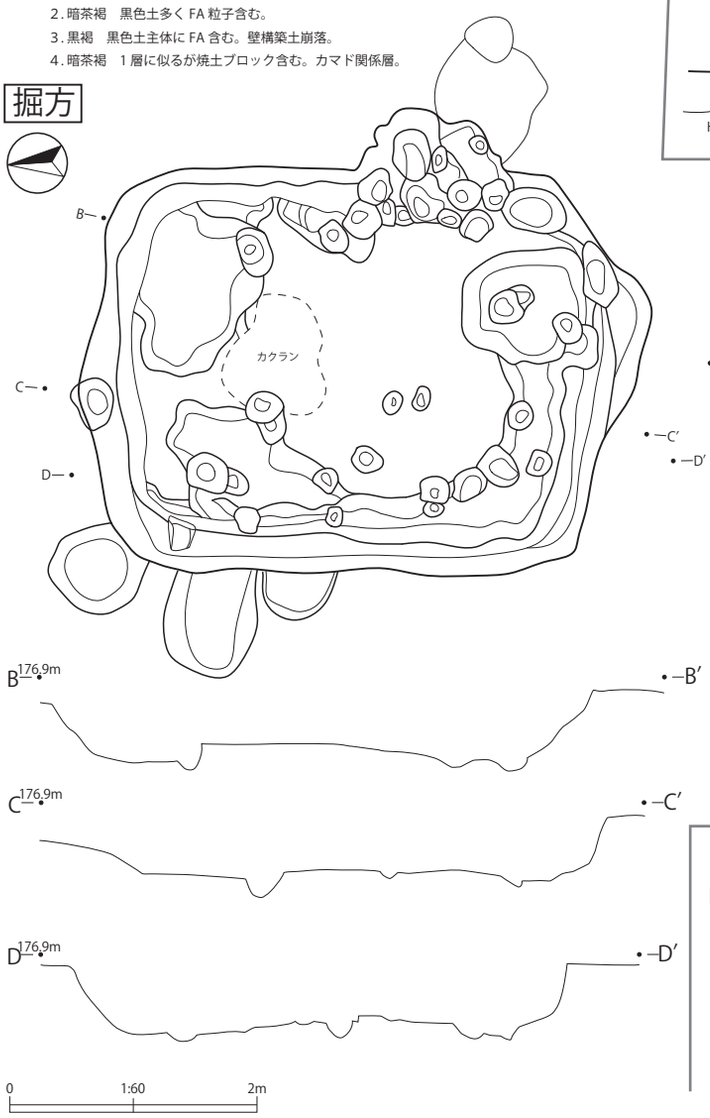


Fig.13　3 号竪穴建物跡（H-3）

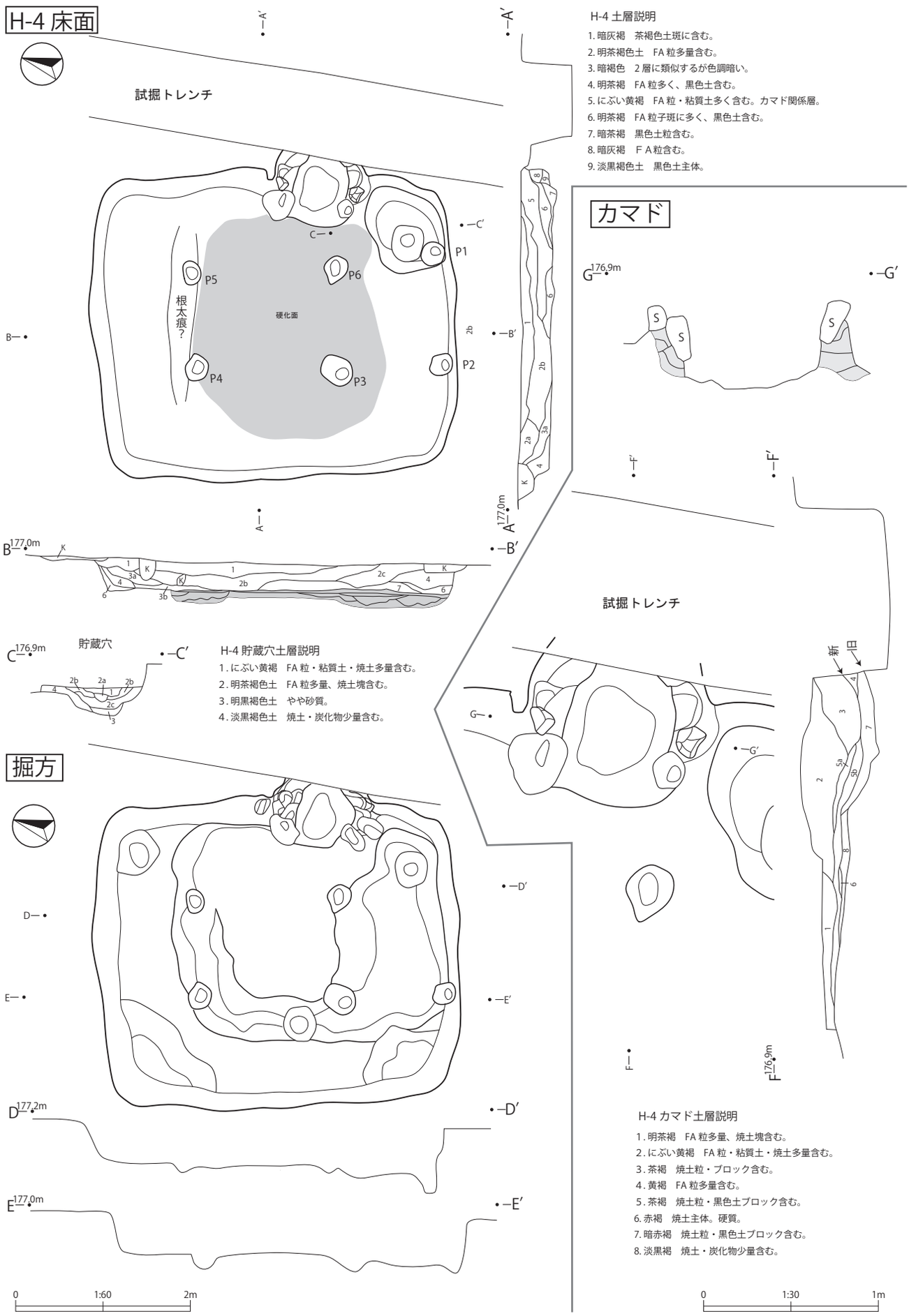


Fig.14　4 号竪穴建物跡（H-4）

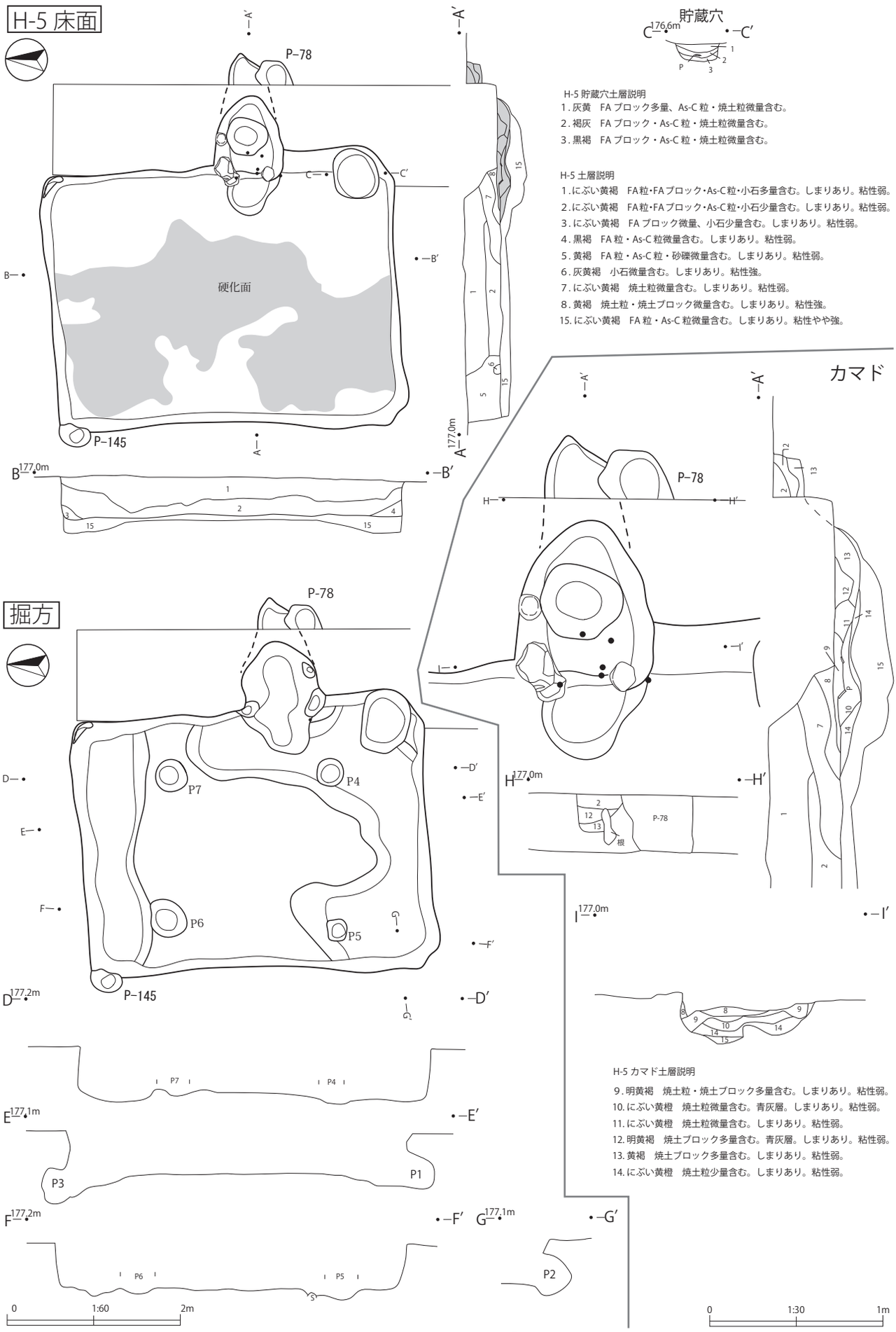
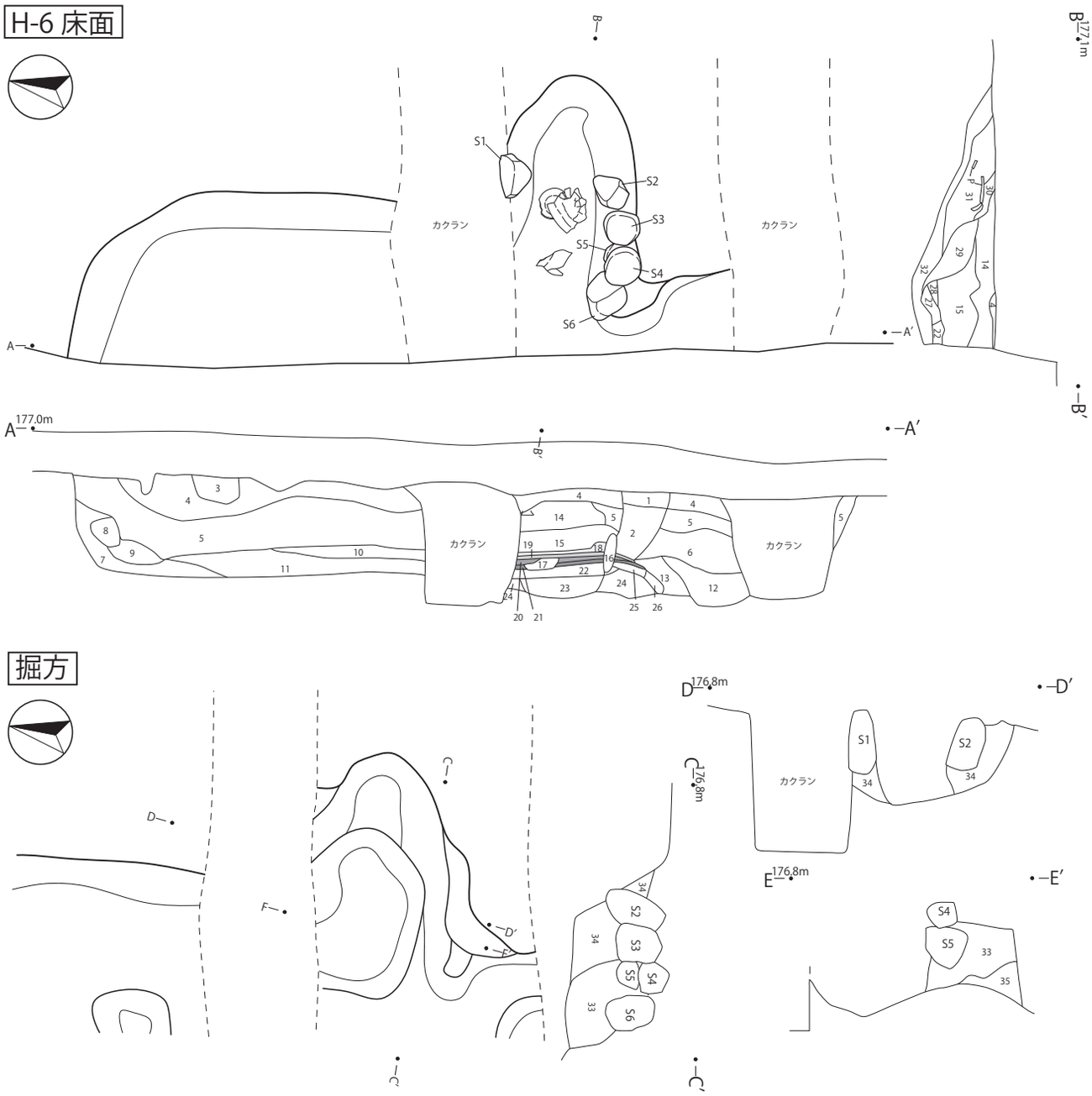


Fig.15　5 号竪穴建物跡（H-5）

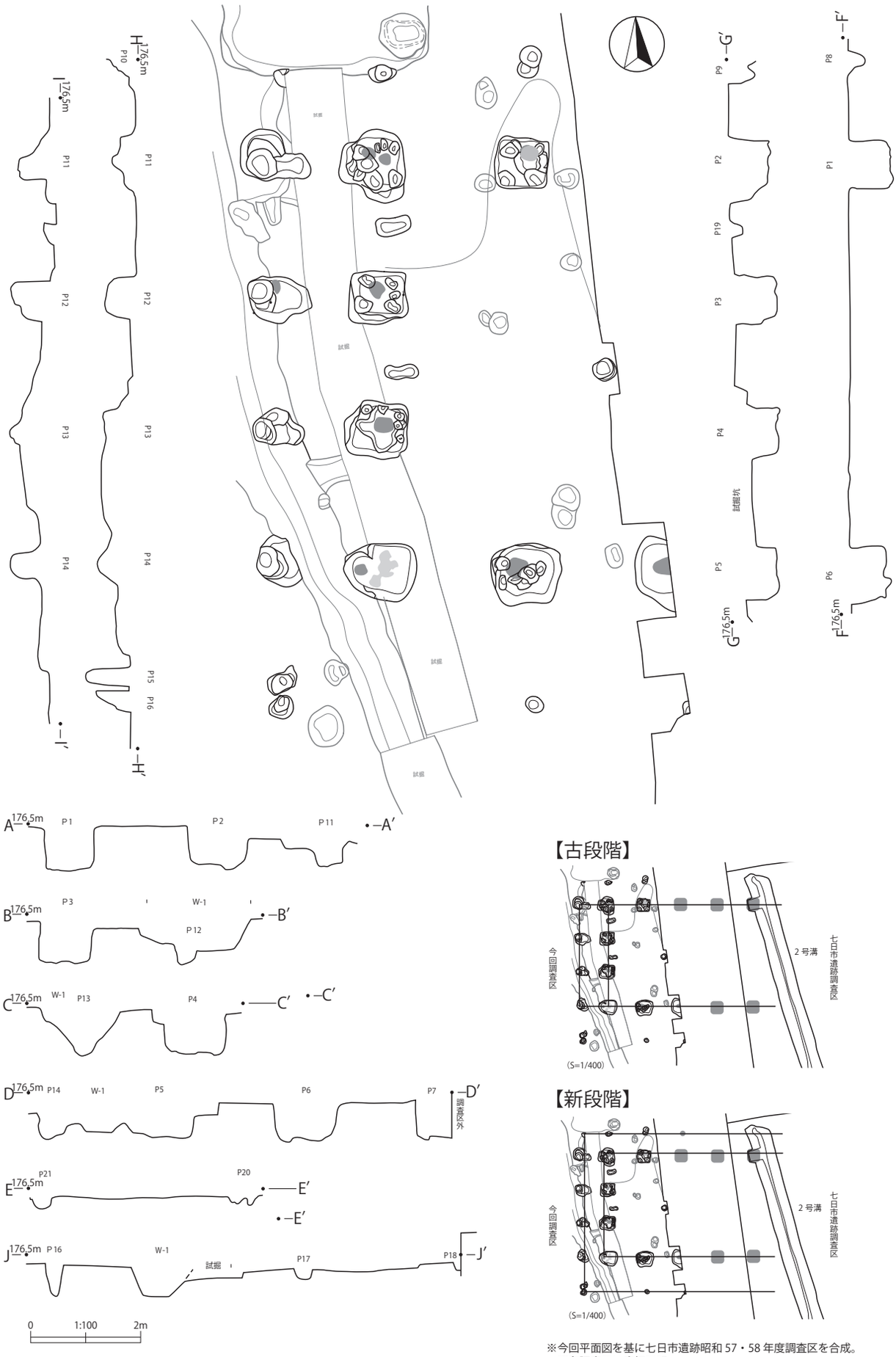


H-6 土層説明

1. にぶい黄褐　FA 粒、As-C 粒、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
2. にぶい黄褐　FA 粒、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
3. 灰黄褐　FA 粒、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
4. にぶい黄褐　焼土粒、FA 粒、As-C 粒、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
5. 明黄褐　焼土粒微量、FA 粒、As-C 粒、砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
6. 灰黄褐　As-C 粒、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
7. にぶい黄褐　As-C 粒、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
8. 灰黄褐　FA ブロック多量、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
9. 黒褐　FA ブロック、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
10. 黒褐　As-C 粒・砂礫微量、炭化物多量含む。しまりあり。粘性強。
11. 黒褐　As-C 粒、砂礫、炭化物微量含む。しまりあり。粘性強。
12. 灰黄褐　As-C 粒・砂礫少量、炭化物多量含む。しまりあり。粘性弱。
13. にぶい黄褐　FA 粒、As-C 粒少量、炭化物多量含む。しまりあり。粘性弱。
14. 明黄褐　焼土粒、As-C 粒、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
15. にぶい黄褐　焼土粒、As-C 粒、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
16. にぶい黄褐　焼土粒、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
17. にぶい黄橙　As-C ブロック微量含む。しまりあり。粘性弱。
18. 浅黄橙　As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
19. 黒褐　炭化物多量含む。しまりあり。粘性強。（2 次面）
20. にぶい黄橙　As-C 粒、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
21. 黒褐　炭化物多量含む。しまりあり。粘性強。（1 次面）
22. にぶい黄橙　As-C 粒、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
23. 灰黄褐　As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
24. 灰黄褐　As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性弱。
25. にぶい黄橙　焼土粒、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
26. にぶい黄橙　焼土粒、As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性弱。
27. 灰黄褐　焼土粒、As-C 粒、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
28. 黒褐　焼土粒、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
29. にぶい黄橙　焼土ブロック微量、As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性弱。
30. 灰黄褐　焼土ブロック、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
31. 明赤褐　焼土ブロック、As-C 粒多量、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
32. 灰黄褐　焼土ブロック、As-C 粒、炭化物微量含む。しまりあり。粘性弱。
33. 橙　As-C 粒少量、焼土粒多量含む。しまりあり。粘性弱。
34. 橙　As-C 粒微量、焼土粒少量含む。しまりあり。粘性弱。
35. 黒褐　As-C 粒、焼土粒少量含む。しまりあり。粘性弱。

0　1:30　1m

Fig.16　6 号竪穴建物跡（H-6）

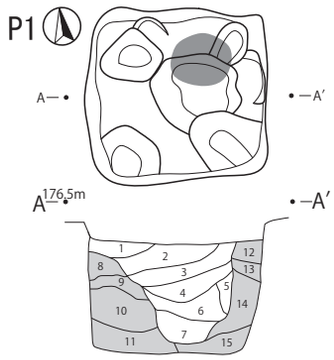


【古段階】

【新段階】

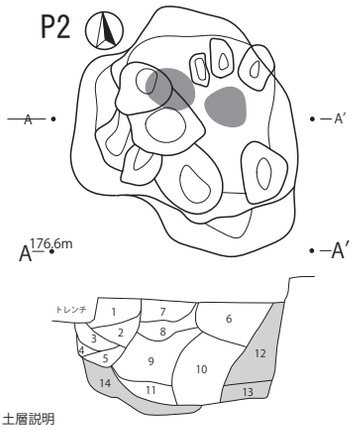
※今回平面図を基に七日市遺跡昭和 57・58 年度調査区を合成。
昭和調査区は座標不明。

Fig.17　1 号掘立柱建物跡（B-1）



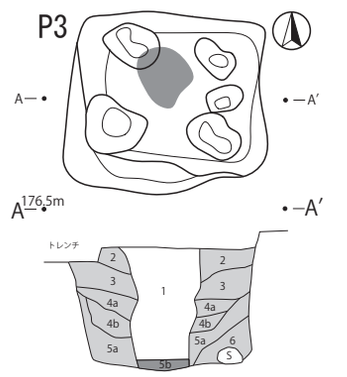
B-1 P1 土層説明

1. 灰黄褐　FA 粒・As-C 粒微量、砂礫少量含む。しまりあり。粘性弱。
2. 黒褐　FA ブロック・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
3. 褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
4. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
5. にぶい黄褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
6. にぶい黄褐　FA 粒少量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱
7. 褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
8. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
9. 黄褐　FA 粒・FA ブロック混在。As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
10. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性強。
11. 黒褐　FA 粒少量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性強。
12. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性強。
13. 褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
14. 褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性強。
15. 暗褐　FA 粒少量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性強。



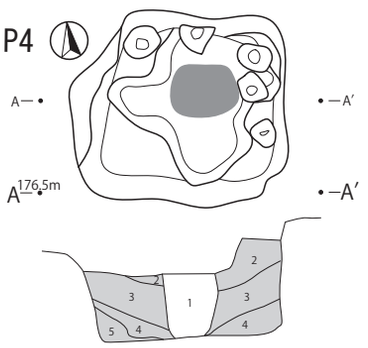
B-1 P2 土層説明

1. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・小石・雲母・赤茶褐色粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
2. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
3. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
4. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
5. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
6. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
7. にぶい黄橙　FA 粒少量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
8. にぶい黄褐　FA 粒少量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
9. 褐　FA 粒多量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
10. 暗褐　FA 粒多量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
11. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
12. 褐　FA 粒・砂礫多量、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
13. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
14. 黒褐　FA 粒・As-C 粒微量・砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。



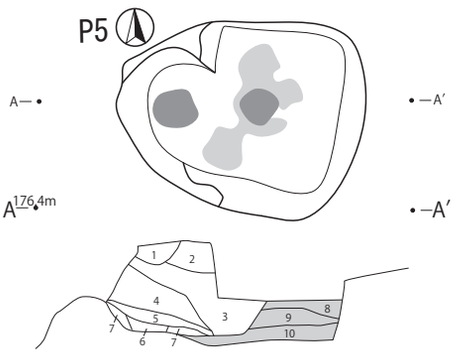
B-1 P3 土層説明

1. 褐　FA 粒少量、As-C 粒微量、砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
2. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
3. 黒褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
4a. 黒褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
4b. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
5. 暗褐　FA 粒多量、As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
6. 暗褐　FA 粒・As-C 粒微量含む。しまりあり。粘性弱。



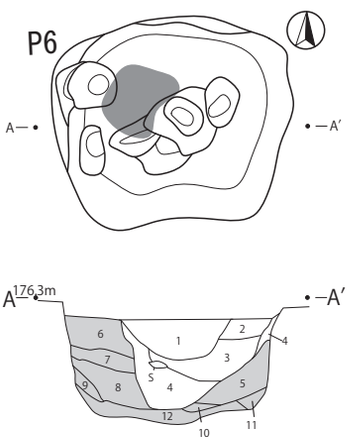
B-1 P4 土層説明

1. 褐　FA 粒・As-C 粒・黒色土少量含む。しまり弱。
2. 褐　FA 粒・As-C 粒・黒色土少量含む。しまり普。
3. 褐　FA 粒・As-C 粒・黒色土多量含む。しまり良。
4. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・黒色土微量含む。しまり
5. 暗褐　黒色土多量。しまり強。



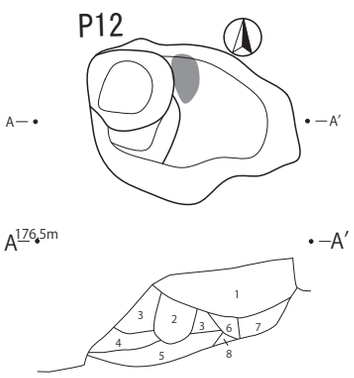
B-1 P5 土層説明

1. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒微量、砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
2. 褐　FA 粒・As-C 粒微量、砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
3. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
4. 褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
5. 褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
6. 黄褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
7. 褐　FA 粒・As-C 粒少量・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
8. 黄褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
9. 黒褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
10. 暗褐　FA 粒、As-C 粒・砂礫微量含む。しまり良。粘性弱。



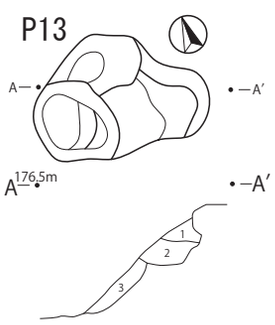
B-1 P6 土層説明

1. 褐　FA 粒微量、As-C 粒・砂礫少量含む。しまり弱。粘性弱。
2. 黄褐　FA 粒微量、As-C 粒・砂礫少量含む。しまり弱。粘性弱。
3. 褐　FA 粒微量、As-C 粒・砂礫少量含む。しまり弱。粘性弱。
4. 黒褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまり弱。粘性弱。
5. 暗褐　FA 粒・砂礫微量含む。しまり弱。粘性弱。
6. 褐　FA 粒・砂礫微量含む。しまり弱。粘性弱。
7. 褐　FA 粒・砂礫微量含む。しまり普。粘性弱。
8. 褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまり弱。粘性弱。
9. にぶい黄褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまり弱。粘性弱。
10. にぶい黄褐　FA 粒少量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまり弱。粘性弱。
11. 黒褐　FA 粒多量・As-C 粒・砂礫微量含む。しまり弱。
粘性弱。



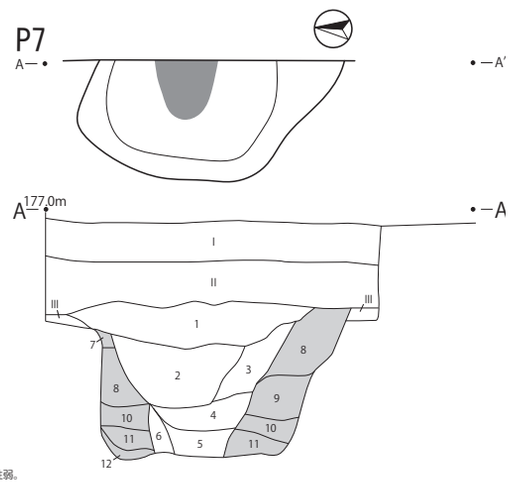
B-1 P12 土層説明

1. にぶい黄褐　FA 粒多量、As-C 粒微量、砂礫多量含む。しまりあり。粘性弱。
2. 黒褐　FA 粒・砂礫微量、As-C 粒多量含む。しまりあり。粘性弱。
3. にぶい黄褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
4. 褐　FA 粒多量、As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
5. 暗褐　FA 粒・As-C 粒多量、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
6. 黒褐　FA 粒・As-C 粒少量、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
7. 暗褐　FA 粒、As-C 粒少量、砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。
8. 暗褐　FA 粒・As-C 粒・砂礫微量含む。しまりあり。粘性弱。



B-1 P13 土層説明

1. にぶい黄褐　FA ブロック・As-C 粒混在。しまりあり。粘性弱。
2. にぶい黄褐　FA 粒微量・As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性弱。
3. にぶい黄褐　FA 粒微量・As-C 粒少量、赤茶褐色粒含む。しまりあり。粘性弱。



B-1 P7 土層説明

1. 褐　FA ブロック・As-C 粒多量含む。しまりあり。粘性弱。
2. 褐　FA 粒微量・As-C 粒含む。しまりあり。粘性弱。
3. 褐　FA 粒微量・As-C 粒少量含む。しまりあり。粘性弱。
4. 暗褐　砂礫多量含む。しまり弱。粘性弱。
5. 暗褐　FA 粒・砂礫含む。しまり弱。粘性弱。
6. 暗褐　砂礫少量含む。しまり弱。粘性弱。
7. にぶい黄褐　FA 粒多量含む。しまりあり。粘性あり。
8. 暗褐　黒色土・砂礫含む。しまりあり。粘性あり。
9. 暗褐　黒色土・砂礫含む。しまり強。粘性あり。
10. 暗茶褐　黒色土含む。しまり強。粘性あり。
11. 暗茶褐　黒色土多量含む。しまり強。粘性あり。
12. 黒褐　黒色土主体。しまりあり。粘性あり。

柱穴埋土

0　1:40　1m

Fig.18　1 号掘立柱建物跡 (B-1) の柱穴

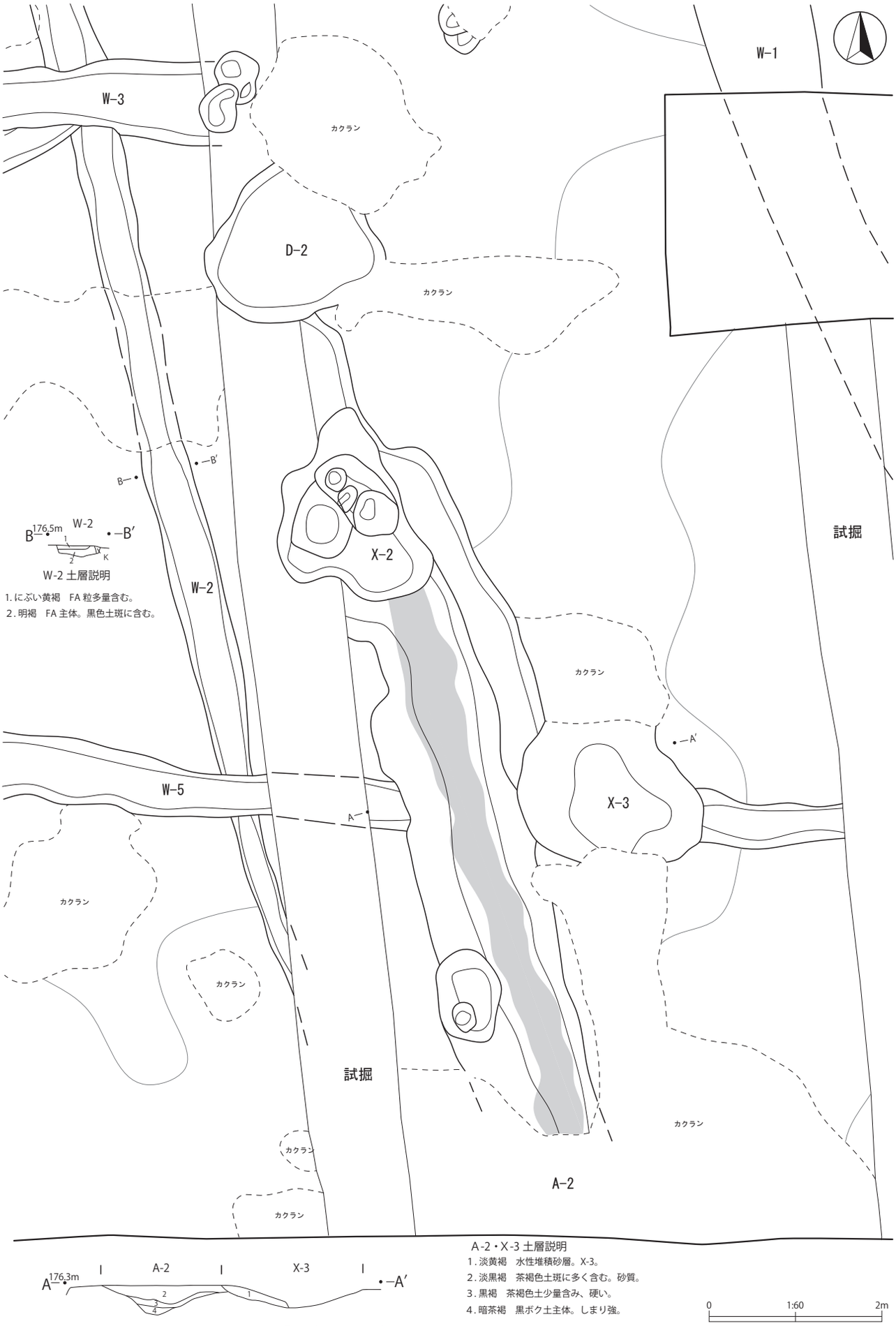


Fig.19　2 号道路状遺構ほか（A-2・W-2・3・5 の一部、X-2・3、D-2）

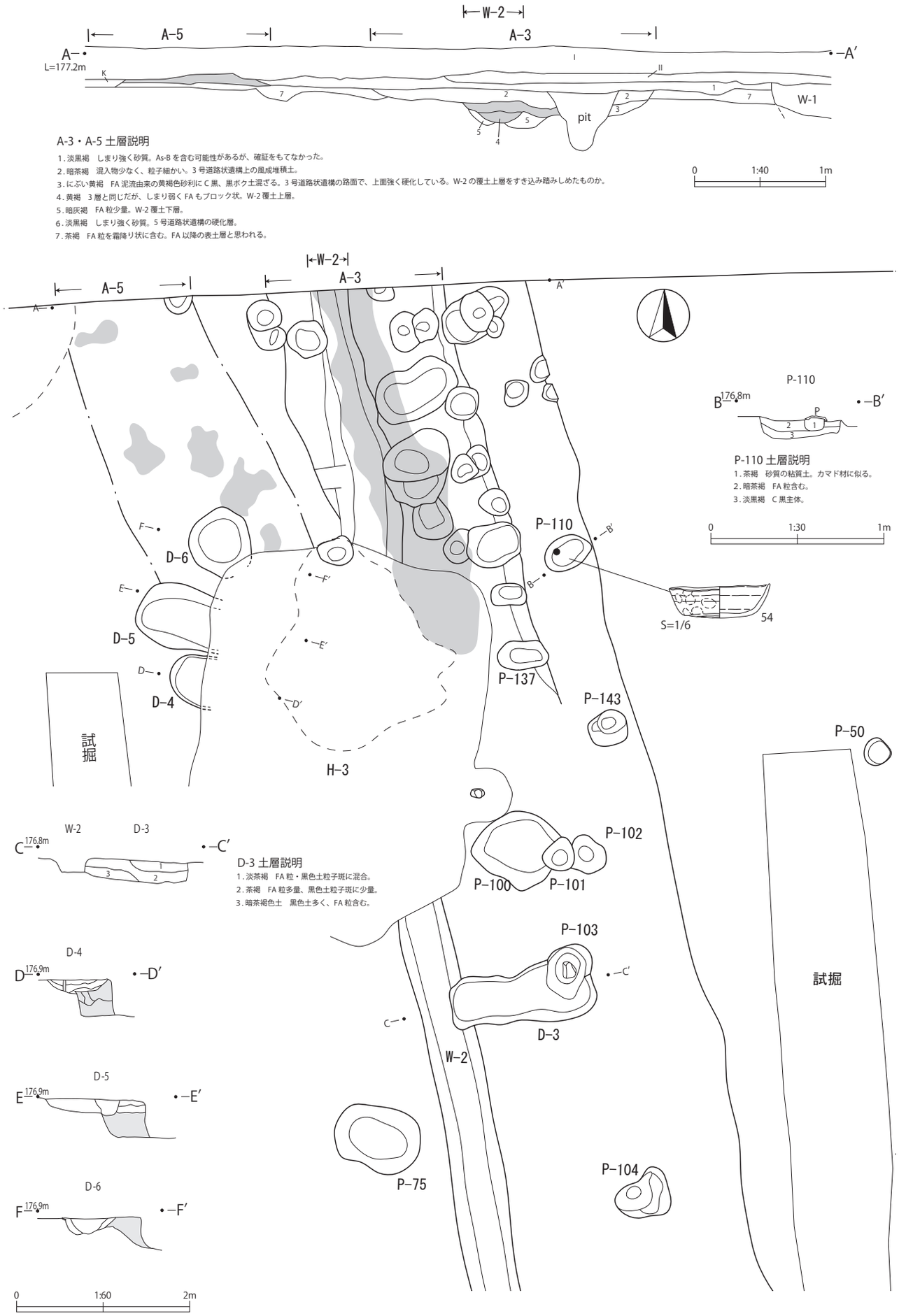


Fig.20　3・5 号道路状遺構ほか (A-3・5、W-2 の一部、D-3 ～ 6、P-110

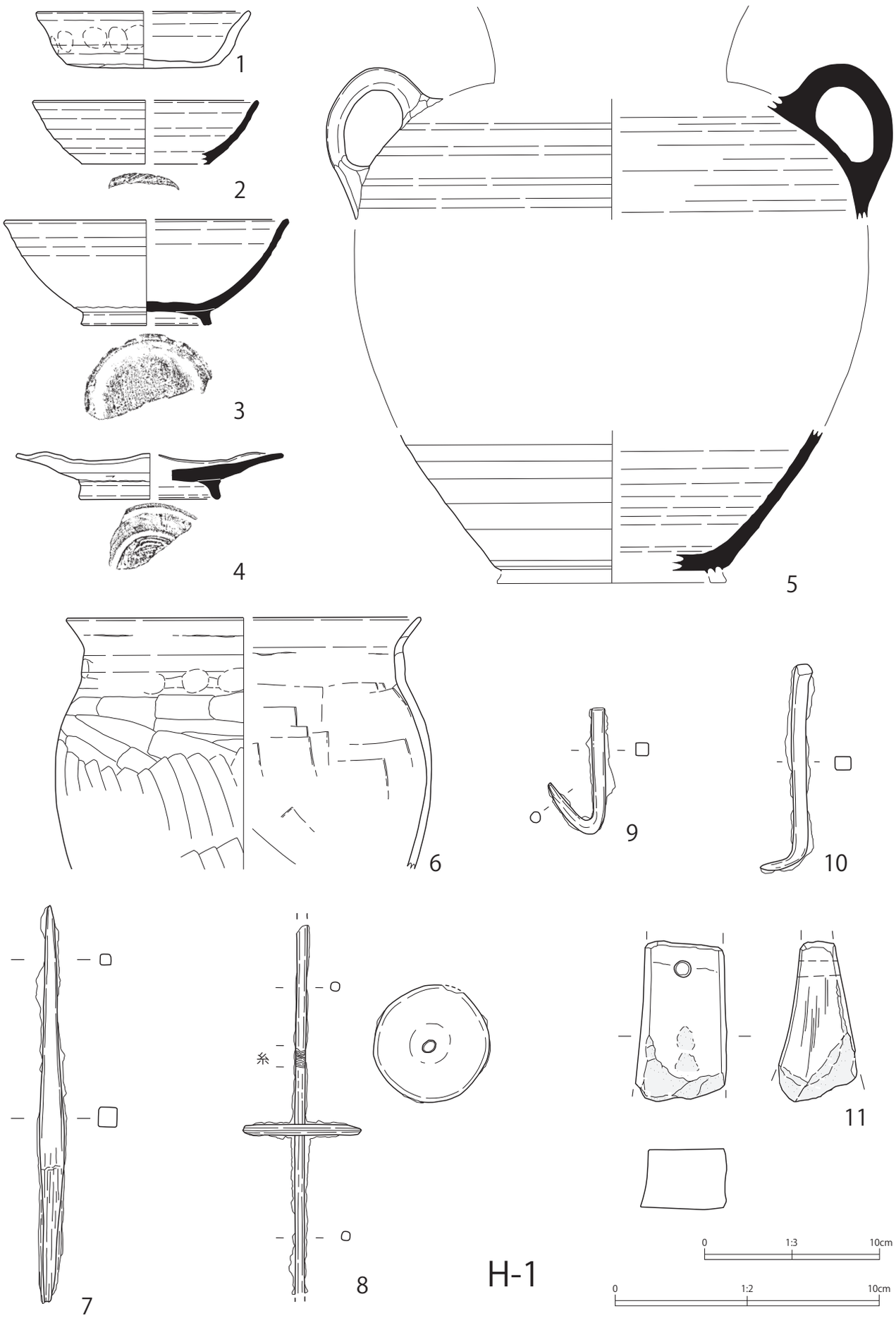


Fig.21　出土遺物 (H-1)

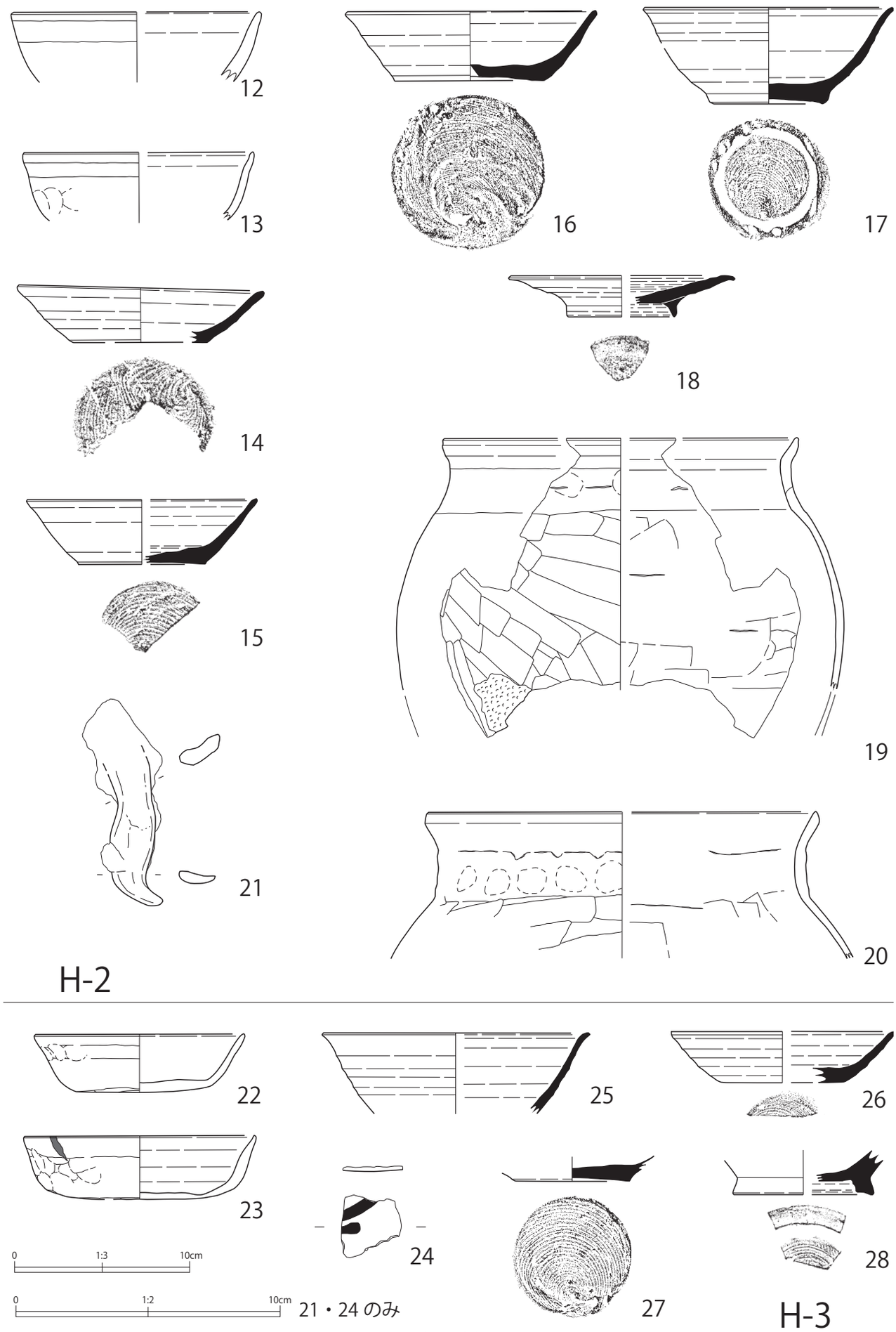


Fig.22　出土遺物 (H-2・3)

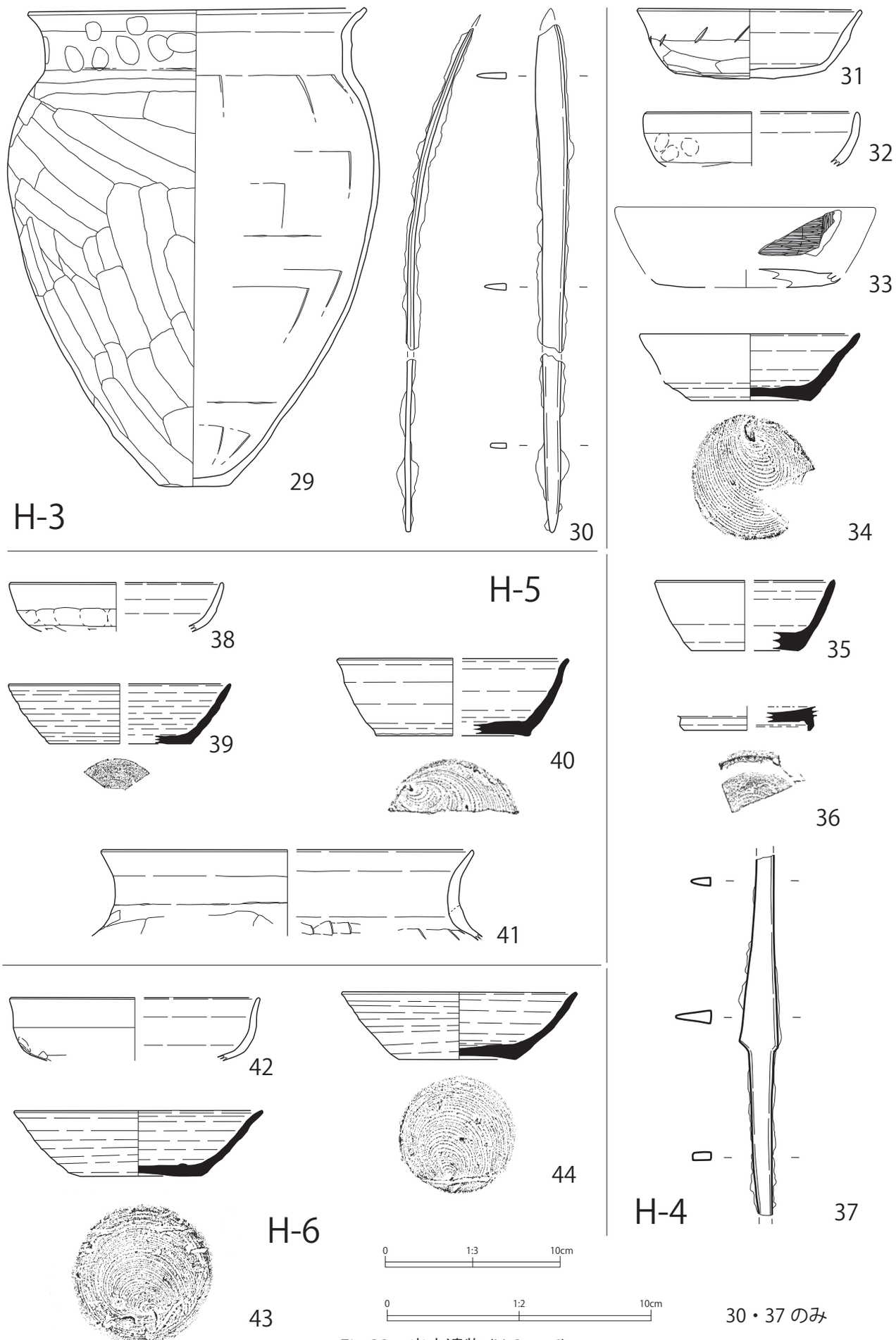


Fig.23　出土遺物 (H-3 ～ 6)

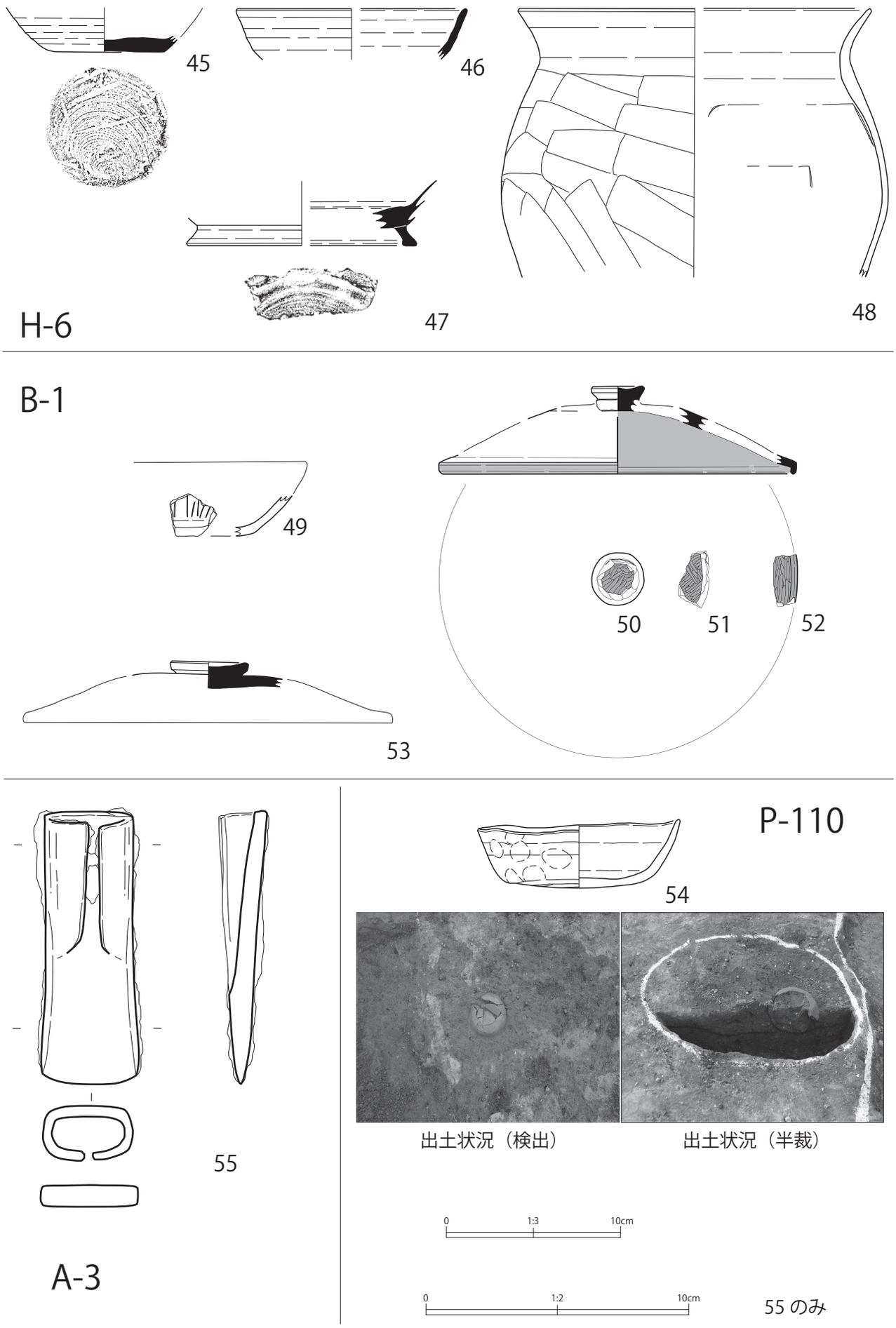


Fig.24　出土遺物 (H-6、B-1、A-3、P-110)

Tab.2　土坑一覧表　単位(m)　()推定　<>残存

遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形状	出土遺物
D-1	1.00	0.65	0.42	楕円	
D-2	2.30	2.00	0.35	台形	
D-3	2.00	1.00	0.25	長方形	
D-4	(0.60)	0.50	0.43	楕円	
D-5	(1.10)	0.70	0.43	長方形	須恵器甕片 1・坏片 1/ 土師器甕片 15・坏片 4
D-6	0.80	0.75	0.18	楕円	須恵器甕片 2・土師器甕片 1

Tab.3　ピット一覧表　単位(m)　()推定　<>残存

遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形状	出土遺物
P-1	0.28	0.22	—	円形	-
P-2	0.42	0.28	—	楕円形	-
P-3	0.50	0.35	—	楕円形	-
P-4	0.33	<0.20>	—	楕円形	-
P-5a	0.50	0.50	—	円形	-
P-5b	0.36	<0.23>	—	方形	-
P-6	0.74	0.64	—	楕円形	-
P-7	0.46	0.45	—	不整形	-
P-10	0.40	<0.25>	—	円形？	-
P-11	0.42	<0.19>	—	円形？	-
P-12	0.58	0.51	—	楕円形	土師器甕片 2　須恵器坏片 2
P-13	0.81	0.54	—	楕円形	-
P-14	0.65	0.42	—	楕円形	-
P-15	0.42	0.38	—	隅丸方形	-
P-16	0.41	0.45	—	隅丸長方形	-
P-17	0.43	0.30	—	隅丸長方形	-
P-18	0.32	0.21	—	楕円形	-
P-19	0.40	0.35	—	隅丸長方形	-
P-20	0.38	0.30	—	楕円形	-
P-23	0.53	0.40	—	楕円形	-
P-24	0.45	0.35	—	楕円形	須恵器坏片 1
P-25	0.43	0.30	—	隅丸長方形	土師器甕片 3　須恵器坏片 1
P-26	0.33	<0.18>	—	円形？	-
P-27	0.35	0.35	—	円形？	土師器甕片 1
P-28	0.30	0.30	—	円形？	土師器甕片 1
P-29	0.40	0.36	—	隅丸方形	-
P-32	0.72	0.57	0.37	楕円形	-
P-33	0.49	0.46	—	楕円形	-
P-34	0.29	0.29	—	隅丸方形	-
P-35	0.32	0.28	—	楕円形	-
P-36	0.40	0.36	—	隅丸方形	-
P-37	0.28	0.21	—	楕円形	土師器甕片 1
P-38	<0.34>	0.30	—	方形？	須恵器坏片 1
P-39	<0.45>	0.55	—	楕円形？	-
P-40	0.33	0.32	—	円形	-
P-41	0.30	0.26	—	楕円形	-
P-42	0.32	0.29	—	不整形	-
P-43	1.14	0.82	—	楕円形	土師器甕片 1・坏片 2
P-44	-	-	—	-	-
P-45	0.32	0.30	—	円形	-
P-46	0.46	0.26	—	隅丸長方形？	-
P-47	0.41	0.32	—	楕円形	-
P-48	0.23	0.23	—	円形	-
P-49	0.31	0.29	—	円形	-
P-50	0.30	0.30	—	円形	-
P-51	0.25	0.23	—	円形	-
P-52	0.23	0.21	—	円形	-
P-53	0.26	0.20	—	楕円形	-
P-54	0.26	0.18	—	楕円形	-
P-55	0.29	0.25	—	円形	-
P-56	0.39	0.39	—	円形	-
P-57	0.25	0.24	—	方形	-
P-58	0.29	0.21	—	楕円形	-
P-59	0.40	0.36	—	円形	-
P-60	0.28	0.23	—	方形	-
P-61	0.36	0.26	—	隅丸長方形	-
P-62	0.53	0.26	—	隅丸長方形	-
P-63	0.24	0.24	—	方形	-
P-64	0.32	0.26	—	円形	-
P-65	0.28	0.26	—	円形	-
P-66	0.40	0.32	—	楕円形	-
P-67	0.17	0.17	—	隅丸方形	-
P-68	0.60	0.52	0.17	円形	-
P-69	0.29	0.28	—	円形	-
P-70	0.45	<0.42>	—	方形	-
P-71	0.35	<0.30>	—	楕円形	-
P-74	0.26	0.22	—	方形	須恵器坏片 2・土師器甕片 13
P-75	1.00	0.75	0.23	隅丸長方形	須恵器甕片 1
P-76	0.66	0.65	0.18	円形	須恵器坏片 1　土師器甕片 2
P-77	1.10	1.00	0.12	楕円形	須恵器坏片 1　土師器甕片 7
P-78	<0.33>	0.33	—	方形？	-
P-79	0.86	0.76	0.23	楕円形	土師器甕片 3
P-80	0.48	0.28	0.32	隅丸方形	-
P-81	0.37	0.22	0.14	隅丸長方形	土師器甕片 2
P-82	0.32	0.22	0.14	隅丸方形	-
P-83	0.44	0.40	—	隅丸長方形	-
P-84	0.75	0.69	—	不整形	-
P-85	0.46	0.32	—	楕円形	-
P-86	0.30	0.26	—	楕円形	-
P-87	0.28	0.26	—	楕円形	-
P-88	0.31	0.30	—	楕円形	-
P-89	0.30	0.25	—	隅丸長方形	-
P-90	0.38	<0.37>	—	楕円形	土師器甕片 1
P-91	0.59	0.36	—	隅丸長方形	-
P-92	(0.43)	0.43	—	円形	-
P-93	(0.95)	0.85	—	方形	-
P-94	0.45	0.44	—	方形	-
P-95	0.58	0.34	—	不整形	-
P-96	0.30	0.22	—	長方形	-
P-98	0.48	0.29	—	楕円形	-
P-99	0.40	0.40	—	円形	-
P-100	0.90	0.85	—	方形	須恵器坏片 1　土師器甕片 1
P-101	0.40	0.37	—	円形	-
P-102	0.42	0.39	—	隅丸方形	-
P-103	0.63	0.52	—	楕円形	-
P-104	0.63	0.49	—	不整形	-
P-105	0.32	<0.17>	—	隅丸方形？	-
P-106	0.32	0.27	—	不整形	-
P-107	0.65	0.51	—	楕円形	-
P-108	0.91	0.83	—	楕円形	土師器甕片 1
P-109	0.38	0.32	—	円形	土師器甕片 4
P-110	0.55	0.48	0.12	楕円形	土師器甕片 1・坏完形 1
P-111	0.34	<0.30>	—	楕円形	-
P-112	1.06	1.06	—	円形	-
P-118	0.35	0.32	—	楕円形	-
P-119	0.30	0.30	—	円形	-
P-120	0.38	0.33	—	楕円形？	-
P-121	0.39	0.38	—	方形	-
P-122	0.58	0.46	0.23	楕円形	-
P-123	0.57	0.50	0.11	楕円形	-
P-124	0.85	0.50	0.41	楕円形	須恵器坏片 1　土師器甕片 1
P-136	0.41	0.24	—	楕円形	-
P-137	0.59	0.33	—	楕円形	-
P-143	0.45	0.40	—	隅丸方形	-
P-144	0.53	0.33	0.19	楕円形	須恵器坏片 1

Tab.4　遺物観察表

H-1

図No.	出土位置	種別　器種	法量(cm)			手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
			口径	器高	底径					
1	カマド	土師器　坏	(12.0)	(3.2)	(8.8)	弱平底　外面：体部上側横ナデ　指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母	にぶい黄褐	やや不良	60%
2	一括	須恵器　坏	(12.6)	(3.5)	(7.2)	口縁部やや外反　ロクロ目やや強　外面：底部回転糸切離し	白色粒・黒色粒・雲母	灰白	良好	30%
3	床直・一括	須恵器 高台椀	(8.0)	(6.0)	(7.0)	口縁部やや外反　外面：底部糸切離し	白色粒・黒色粒・雲母・石英	明黄褐	やや不良	40%
4	No. 31	須恵器 高台皿	(15.0)	(2.6)	(3.8)	口縁部　ゆがみ強　内外面：炭化物付着（焼失に伴うものか？）　外面：体部下端横位ヘラケズリ（高台部接合に伴う整形？）	白色粒・黒色粒・雲母	灰白	やや不良	40%
5	No. 1	須恵器 四耳壺？	—	—	(13.0)	高台付　長頸壺と思われる。	白色粒・黒色粒・雲母・石英	灰黄褐	良好	肩部・底部破片
6	No. 4・No. 21・一括	土師器　甕	(20.0)	(14.3)	—	口縁部コの字状　外面：頸部指頭痕　胴部上側横位ヘラケズリ　中側斜位ヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母・石英	明赤褐	やや良好	口縁～胴部 40%

図No.	出土位置	種別　器種	法量(cm)			材質・特徴	重さ(g)	残存率
			口径	器高	底径			
7	No. 7	鉄製品　鑿？	(15.0)	0.2～0.9	0.2～0.9	茎部に木質残存。	23.0	端部破片
8	No. 8	鉄製品 紡錘車	(13.9)	0.3～0.4	0.3～0.4	軸部に巻き付けられた糸が錆化で固定されている。	25.0	90%
9	No. 6	鉄製品　鑿？	(7.0)	0.2～0.5	0.2～0.5	先端がねじ曲がっている。	6.0	針先部
10	No. 10	鉄製品　鉄釘	(8.6)	0.3～0.6	0.3～0.5	先端がねじ曲がっている。	13.0	90%
11	No. 5	石製品　砥石	6.1	3.0	2.3	割れた砥石に穴を開けて整形し、提砥としたか。	70.0	100%

H-2

図No.	出土位置	種別　器種	法量(cm)			手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
			口径	器高	底径					
12	一括	土師器　坏	(14.0)	(4.0)	—	器厚肉厚	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母・石英	橙	やや不良	口縁～体部 20%

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
14	一括	須恵器	坏	13.8	3.1	7.6	浅身　口縁やや外反　外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒・雲母	外面：灰白／内面：褐灰	良好	60%
15	一括	須恵器	坏	(13.0)	(3.7)	(7.2)	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒・雲母	褐灰	良好	40%
16	No.4・8	須恵器	坏	14.2	4.0	8.5	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒・雲母	灰白	やや不良	70%
17	No.3	須恵器 高台塊		(14.0)	(5.5)	高台径 6.1	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒・雲母	灰白	やや不良	40%
18	一括	須恵器 高台皿		(12.6)	(2.4)	(6.0)	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒・雲母	灰	良好	25%
19	No.20・21	土師器	甕	(20.0)	(13.8)	—	外面：頸部指頭痕 胴部炭化物付着　上側横位ヘラケズリ　中側斜位ヘラケズリ	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母・石英	橙	良好	口縁～胴部 20%
20	No.5・10・13	土師器	甕	(22.0)	(8.3)	—	外面：頸部指頭痕 胴部上端横位ヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母	橙	良好	口縁部 25%

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	材質・特徴	重さ(g)	残存率
21	No.16	鉄製品 鉄塊系		(6.0)	0.4～1.4	0.2～0.6	しずく状。中心から分解するような錆び方。	31.0	100%

H-3

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
22	No.1	土師器	坏	11.8	3.3	7.5	外面：口縁部指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母・石英	橙	良好	80%
23	カマド・D-5	土師器	坏	(13.0)	(3.6)	(10.6)	内外面：口縁部油煙付着（灯明皿？）　外面：体部指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母・石英	にぶい褐	やや良好	60%
24	一括	土師器	甕	長：(2.3)	幅：(2.2)	—	外面：墨書	黒色粒・雲母・石英	にぶい赤褐	良好	胴部破片
25	No.2	須恵器	坏	(15.0)	(4.6)	—	口縁部やや外反　ロクロ目強	白色粒・黒色粒・雲母・石英	灰黄	やや不良	口縁～体部 30%
26	一括	須恵器	坏	(12.6)	(2.9)	(3.5)	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒	灰	良好	40%
27	一括	須恵器	坏	—	1.4	6.5	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒	灰	良好	底部 100%
28	一括	灰釉陶器 浄瓶？		—	(2.5)	(7.8)	外面：底部糸切り　内面：灰釉	白色粒・黒色粒	灰白／釉：オリーブ黄	良好	高台部破片
29	No.9・カマド	土師器	甕	19.0	27.1	4.0	外面：頸部指頭痕　胴部上半横位ヘラケズリ　下半斜位ヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母	橙	良好	90%

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	材質・特徴	重さ(g)	残存率
30	No.3	鉄製品	刀子	(19.2)	0.6～1.1	0.1～0.2	全体に曲げられている。	22.0	100%

H-4

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
31	No.5・一括	土師器	坏	22.6	4.0	8.5	外面：口縁部横ナデ　櫛描き文　体～底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母	橙	良好	80%
32	貯穴	土師器	坏	(12.0)	(3.1)	—	外面：口縁部横ナデ　体部指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母	橙	良好	口～体部 40%
33	一括	土師器	塊	—	(1.0)	(10.0)	外面：底部手持ちヘラケズリ　内面：底部黒色処理・ミガキ	白色粒・黒色粒	外面：橙／内面：黒	良好	底部破片
34	No.1	須恵器	坏	(12.4)	3.8	6.8	ロクロ目強　外面：底部回転糸切り離し	白色粒	外面：オリーブ灰／内面：灰	良好	70%
35	一括	須恵器	坏	(10.0)	(4.0)	(6.0)	外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒	浅黄	やや不良	体～底部破片
36	一括	灰釉陶器 塊		—	(1.4)	高台径 (7.0)	内外面：灰釉　外面：底部回転ヘラケズリ　三ヶ月高台　猿投 K90 ？	白色粒・黒色粒	灰黄／釉：灰白	良好	高台部破片

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	材質・特徴	重さ(g)	残存率
37	No.4	鉄製品	刀子	(13.6)	0.5～1.4	0.1～0.4	茎と切先の先端を欠く。	20.0	60%

H-5

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
38	一括	土師器	坏	(12.0)	(2.8)	—	弱丸底　外面：口縁部横ナデ　体部指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母・石英	橙	良好	20%
39	一括	須恵器	坏	(12.6)	3.4	(8.0)	口縁～体部直線的　ロクロ目強　外面：底部回転ヘラ切り	白色粒・黒色粒	灰	良好	20%
40	一括	須恵器	坏	(13.0)	4.4	(8.6)	口縁部やや外反　外面：底部回転糸切り離し	白色粒・黒色粒・雲母・石英	外面：灰白／内面：灰	良好	50%

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	材質・特徴	重さ(g)	残存率
41	No.4・一括	土師器	甕	(21.0)	(4.9)	—	外面：胴部上部横位ヘラケズリ　内面：胴部上部横位ヘラナデ	白色粒・黒色粒・雲母・石英	橙	良好	口縁～頸部 25%

H-6

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
42	一括	土師器	坏	(14.0)	(3.6)	—	弱丸底　外面：口縁部横ナデ　体部　指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒	にぶい赤褐	良好	15%
43	No.4	須恵器	坏	14.0	3.8	6.9	外面：口縁やや外反　底部回転糸切り離し	白色粒	口～体：オリーブ灰／体～底：にぶい赤褐	良好	90%
44	No.5	須恵器	坏	13.2	3.8	6.6	外面：底部回転糸切り離し。底部外面墨書「？」	白色粒	口～体：灰／体～底：にぶい赤褐	良好	90%
45	No.1	須恵器	坏	—	(2.5)	6.6	外面：底部回転糸切り離し。底部外面ヘラ記号「－」　墨書「？」	白色粒・黒色粒・雲母・石英	にぶい黄橙	良好	底部 90%
46	カマド	須恵器	坏	(13.0)	(2.9)	—	自然釉付着	白色粒・黒色粒・雲母	褐灰	良好	口縁部破片
47	一括	灰釉陶器 長頸瓶		—	(3.7)	高台径 (13.0)	しっかりとした高台	黒色粒・石英	灰白	良好	高台部破片
48	No.2・3	土師器	甕	(20.0)	(15.3)	—	口縁部　弱コの字状　外面：胴部上部横位ヘラケズリ　中部斜位ヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母	橙	良好	口縁～胴部 25%

B-1

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
49	P 2	土師器	坏	—	2.2	—	内面：放射状暗文	白色粒・黒色粒・雲母	橙	良好	体部破片
50	P 3	須恵器	蓋	摘径 3.0	摘高 1.4	—	内面：黒色処理・ミガキ	白色粒・黒色粒・雲母	明黄褐	良好	摘み部破片
51	P 3	須恵器	蓋	—	—	—	内面：黒色処理・ミガキ	白色粒・黒色粒・雲母	明黄褐	良好	天井部破片
52	H -1 （流れ込み？）	須恵器	蓋	—	(1.1)	—	内面・外面（口縁部のみ）黒色処理・ミガキ	白色粒・黒色粒・雲母	明黄褐	良好	口縁部破片
53	P 6　No.1	須恵器	蓋	4.2	0.7	—	環状摘み　外面：天井部回転ヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母	灰	良好	摘み部破片

P-110

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率
54	No.1	土師器	坏	11.4	3.6	—	弱丸底　外面：体部指頭痕　底部手持ちヘラケズリ	白色粒・黒色粒・雲母・石英	橙	やや良好	90%

A-3

図No.	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	材質・特徴	重さ(g)	残存率
55	No.10	鉄製品	鉄斧	10.3	3.3～3.7	0.1～1.9	袋状鉄斧	178.0	

Ⅵ　発掘調査の成果と課題

今回の池端北耕地下ノ割遺跡の発掘調査では、奈良時代・平安時代の各々特色ある遺構・遺物に恵まれた。本章では遺構の変遷を整理し、特徴的な遺構・遺物について所見を示しておきたい。

(1)遺構の変遷

最古段階となるのは遺構の切り合い関係から、1号掘立柱建物跡と2号溝である。1号掘立柱建物跡は出土遺物から8世紀前半に位置づけられる大型のもので、ほぼ正方位で最終的には四面廂を有する堂々たる建物である。柱穴内の土層や柱痕から、最低2時期を見込むことができる。2号溝は切り合い関係から最古段階と考えられるものだが、時期を示す遺物は出土していない。ただ、出土遺物から竪穴建物跡の中でも古段階の4～6号と概ね直行する軸方向なので、それらに近い時期、つまり8世紀末以降と考えられる。

新段階となるのは竪穴建物跡6軒と道路状遺構で、それらは切り合い関係を根拠に竪穴建物跡が新段階(古)、道路状遺構が新段階(新)となる。

新段階(古)の竪穴建物跡は、出土遺物から西端のH-6→5→4→3→2→1の順と考えられ、9世紀前半から後半にかけて、徐々に東方へと建て替えを繰り返して移動するようである。調査区東側隣接地は、関越自動車道建設に伴う調査において今回とほぼ同時期の竪穴建物跡40軒以上が密集状態で確認された七日市遺跡昭和57・58年度調査区(平田ほか1986)があり、それをムラの中心部(母体)とすれば、今回調査の竪穴建物はそちらへ集約されていく様子を示しているのかも知れない。そう考えた場合、母体との間を分かつかのような2号溝と、七日市遺跡昭和57・58年度調査区の2号溝は、ある時期のムラの境界として機能していた可能性を指摘しうるものである。なお、七日市遺跡平成28年度調査区でも同時期の竪穴建物は確認されているが、今回の調査区と七日市遺跡昭和57・58年度調査区の間には谷が入るようであり、或いは別のムラである可能性も考えられる。今後想定される東側一帯の調査によって、次第に様相が明らかとなることが期待される。

新段階(新)と考える道路状遺構は、新段階(古)の竪穴建物跡を切るもので、3号道路状遺構の路面直下となる3号竪穴建物跡のカマドが封印されたかのように集石で覆われる点、同竪穴部が埋め戻しを思わせる覆土である点を根拠とすれば、9世紀後半に開道されたと推定可能である。道路に伴う地鎮の可能性を有するP-110出土の土師器坏(54)は、その仮定に対して矛盾の無い時期である。また、2・3号道路状遺構は先の2号溝に平行ないしは重複する位置関係であり、2号溝によって大地に刻み込まれた地割を踏襲したものとも考えられる。具体的な時期を示し難い現状であるが、七日市のムラの西辺を南北に通る道というイメージを抱くものである。

その後　道路状遺構は中世まで引き継がれる可能性が高く、近世の区画溝である1号溝の走軸にも影響を残している。この地から古代の集落が消えた後、現在に至るまで積極的な開発の無い耕地として土地利用がなされていたことを予想させる。調査区東側至近に開鑿された中世灌漑用水路「女掘」は、こうした脈略の中で評価しうるものと思われる。

(2)特徴的な遺構と遺物

今回の調査では、予想外とも言える特徴的な遺構・遺物が確認された。以下、本遺跡における二本柱とも言える大型掘立柱建物跡と道路状遺構について、簡単な私見を述べておきたい。

大型掘立柱建物跡と内面黒色土器　1号掘立柱建物跡は、身舎の柱穴が1m四方の方形かつ大規模なもので、推定上野国府域の発掘調査でもほぼ例のない規模である。調査所見では、片面ないし両面廂の高床構造から四面廂の平地式へと変遷したと考えられ、一棟単独の可能性が高い。

Fig.17の右下には、隣接する七日市遺跡昭和57・58年度調査区と合成した図を示した。基準座標が異なる図を合成している為に不正確さは免れないが、報告書掲載の平面図を詳しく見ると七日市遺跡2号溝北端には方形土坑状の表現があり、写真図版でも確認できる。この部分についての説明は一切無いので確証を持てないが、方形土坑状部分は今回調査の柱穴と大きさ・形態ともに同じなので、同一建物跡の柱穴の一つである可能性が高い。それ以外に柱穴と思しきものは、図・写真共に確認できない状態だが、当時の調査水準を思えば攪乱と誤認した可能性も高い。上記の仮定で改めて本建物跡の規模を考えると、身舎の東西は4間以上と推定され、東西棟であったと思われる。

遺物は非常に少ないが、柱穴や付近の竪穴建物に紛れ込んだ内面黒色土器の坏身と坏蓋(33・50～52)はロクロ整形で内面を磨いた上に炭素吸着で黒色処理を施した特徴的なもので、それ自体の形態や共伴須恵器坏蓋(53)から8世紀前半に

位置づけられるものである。近隣における同時期の類例として、推定上野国府の元総社小学校校庭地点(平成 25 年度 21a トレンチ 1 号溝)と元総社西川・塚田中原遺跡にある程度で、他に県内では太田市の山田郡衙関連遺跡に数例ある程度の稀有なものとされる(神谷 2015)。元総社小学校出土例と本遺跡出土例と直接比較すると、器形的には本遺跡例の方が新しい様相を呈するが、調整等の質感は良く似ている。これら内面黒色土器を国府・郡衙における特別な場面で使用する器と考えた時、1 号掘立柱建物跡出土例は大型掘立柱建物跡の性格を暗に示すと言える。時期尚早とは思うが、1 号掘立柱建物跡の性格を、国府の出先施設のような可能性を考えたい。

道路状遺構の性格　5 条確認された古代に遡る道路状遺構は、概ね全て平行関係にあることから、同一道路のある時期の一部であったと理解できる。調査区東の農道(現在関越下)は、地元では「鎌倉街道」と云われており、吉岡町大久保の三宮神社と前橋市元総社の総社神社を結ぶ街道とされている。Fig.2 には昭和 46 年の前橋市基本図を示したが、これによると総社方面からの「鎌倉街道」午王頭川渡河点で北西方向に分岐する直線的な地割の存在が確認できる。今回確認された道路状遺構は正にその地割上に位置しており、その地割が古代道路であることを証明した。なお、GHQ 撮影の航空写真で当該地割を北へ追跡すると、三宮神社西方を通って渋川方面に伸び、近世に主要街道となる三国街道に合流するようである。道路の性格を俄かに断ずることは慎まなければならないだろうが、現時点では上野国府を中心に張り巡らされた伝路の一つと位置付けて良いように思う。

まとめ　以上の検討により、今回確認された 8 世紀前半の大型掘立柱は、国府の出先施設としてこの地に設置され、その廃絶後に伝路として整備されたと考えられた。しかしこれが何の為に置かれた施設なのか、見当すらつかないのも事実であるが、後に整備される伝路とは無関係と思えない。
今後予想される、スマートインターチェンジ周辺開発に伴う発掘調査の進展が期待される。

参考文献

岡野茂・中束耕志 2017『七日市遺跡』吉岡町教育委員会

神谷佳明 2015「元総社小学校校庭出土の黒色土器について」『推定 上野国府』平成 25 年度調査報告　前橋市教育委員会

平田貴正・秋池武・井上唯雄 1986『七日市遺跡 滝沢古墳 女塚遺跡』吉岡村教育委員会 群馬県教育委員会 日本道路公団